漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第三章

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典
第三章

第十五話 抗う事……4P

第十六話 均衡を保つ者……15P

第十七話 死に至る病……29P

第十八話 希望に続く病……43P

第十九話 託されたもの……53P

第二十話 あたしの世界……63P

第二十一話 デストルドー……71P

第二十二話 世界の果てで（前編）……82P

第二十三話 世界の果てで（後編）……95P

最終話 終末、もしくは世界の終わり……111P

エピローグ……127P

あとがき……131P

漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第十五話

ヒトは生きる限り、何かに抗(あらが)わなければならない。

例えば、吐き気がする様な嫌悪感に。
例えば、どうしようもない現実に。
例えば、理不尽なこの世界に。

生きるという事は即(すなわ)ち、抗う事なのだろう。
人間は諦(あきら)められない事が在(あ)るから生きていける。
叶えたい願い。想い。希望。願望。夢。

だが、多くのものは手に入らない。
掴(つか)んだと思えば、指の隙間(すきま)からこぼれ落ちてしまう。
全ては儚(はかな)い夢物語――

そしてヒトは絶望する。
救いなど在りはしないと。
幸せなど幻想でしかないと。
そして残酷な運命を呪い、不条理な世界を憎む。

しかし、それでもヒトは生きる。
運命に抗い、世界に抗いながら。
いつか何かが変わると信じて……。

第十五話　抗う事

見渡す限り全てが敵だった。数は三十を下らない。鋼鉄の戦闘機械獣（きかいじゅう）――ゾイドの群（むれ）。
それが、たった一機の黒い〈コマンドウルフ〉を遠巻きに囲んでいる。
その情景を遥か上空から俯瞰（ふかん）する様に見ている。
（――これは夢だ）
ぼんやりとした意識でアサトはそう確信した。もう何度目になるかも覚えていない。この三年間、忘れた頃に見る夢。
だからこの続きも知っている。
包囲されている黒い〈コマンドウルフ〉――〈ヤミヒメ〉のコクピットに視点が切り替わる。
『――ったく！　どうしろっていうんだ……』
黒い髪と瞳の青年が言った――三年前の自分だ。
そして――
『マスター……』
アサトの腕に抱かれている少女が、苦しげに呟（つぶや）いた。
紅（あか）い髪と瞳の少女だ。
（……）
『すまない、クノキ……ここまでだ』
かつての自分が言う。対する少女の言葉をアサトは知っている。
『貴方（あなた）に……竜の、力を――』
『やめろ！　お前のカタチが保（たも）てなくなる！』
『大丈夫……私はずっと……貴方の側（そば）にいます』
『クノキ！』
『全リミッター解除。〈ＤＦＣ〉完全開放――』
やがて少女の身体（からだ）が紅くぼんやりと発光していく。
『クノキ……！』
（やめろ）
『やめろ、やめてくれッ!?』

叫んでいるのが『今の自分』なのか『夢の中の自分』なのか判らなくなる。
『マスター……』
それでも少女は言葉を紡（つむ）ぐ。
『御自愛ください――……』
無表情だった少女の顔が薄く微笑（ほほえ）んだ。
（もういい……やめてくれ！）
そして少女の姿が紅（あか）い粒子になって――消えた。
『――――ッ⁉　くっ、ううう……うわああ――――ッ⁉』
夢の中の自分が絶叫する。
他にどうする事も出来なかった。
だから――

●
●
●

目覚めは最悪だった。
この三年間、爽快な気分で目覚めた記憶が無い。
忌々しげに、伸ばし気味の黒い髪をかき上げると、青年が割りと整った顔立ちをしていることが判る。
だが、彼を美形と評する者は居ないだろう。不健康そうな顔色と、無気力そうな表情が全てを台無しにしている。
アサト・タチバナはそういう男だ。
年齢は二十代前半だが、何かに疲れた様な雰囲気が彼にはある。
「………で？　お前は何をしてるんだ」
すぐ横にヒトの気配を感じ、しかし驚くでもなく、アサトは問い掛けた。
「ふふふ。ようやく起きましたねえ」
アサトが声を掛けた人物は、のんびりとした口調でそう応えた。やや低めの女性の声だ。
アサトは声の主に視線を向けた。そこに居たのは二十代半ばくらいの若い娘だ。
胸元まで届く黒い艶やかな髪。大きめの黒い瞳はとろんとしている。薄っすらと微笑を浮かべた清楚な表情と、どこか幼さを感じさせる仕草は、見る者を穏やかな気持ちにさせる。
積極的に訴えかける派手さは無いが、気付けば目で追ってしまう――そんな控（ひか）えめだが

端麗な容姿をしている。
ハルカ・クスノセ。
アサトが所属する〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所長であり、同居を始めてからもう三年になる。
「今日はどう起こそうかと考えていたら、あなたの寝顔に見入ってしまって」
ハルカはやはりのんびりとした口調で言った。
「面白いかね、俺の寝顔なんぞ見て」
「ええ、それはもう。愛しいヒトの無防備な寝顔が見られるなんて、幸せな事でしょう？」
「……」
恥ずかしげも無く、そんな事を言う黒髪黒瞳のおっとりした娘に、アサトは返す言葉が見つからなかった。
事実その通りだと思う。
幸せとは本来そんなささやかな事なのだと。
「うらやましいよ。お前のそういう性格が」
「そうですか？　自分では難儀（なんぎ）な性格だと思っているんですが」
そう言いつつも、薄っすらと微笑は浮かべたままハルカが続ける。
「カスミちゃんに話したそうですね。クノキさんの事」
クノキ。
アサトの愛機〈ヤミヒメ〉の中で眠っている少女――その正体はヒト型の〈オーガノイド〉である。その事をカスミに話したのが昨日の事だ。
「……頃合だろう。それに何が変わる訳でもない」
「変わりますよ。クノキさんが実は女の子だったと知れば、嫌でもあなたとの関係を疑ってしまう。カスミちゃんがあなたをどう想っているか――気付いていない訳ではないのでしょう？」
少し意地悪そうにハルカは言った。
「あの年頃にはよくある『勘違い』だろう。たまたま近くに居たのが俺だっただけだ」
「そうだとしても、乙女心は傷付きやすいんですから。もう少し気に掛けてあげてください」
やはり微笑は浮かべたまま、少し困った様にハルカは言った。
その表情にアサトは罪悪感の様なものを感じた。
「お前もそうなのか？」
「はい？」

「俺はお前の事も傷付けてるんじゃないのか」

ハルカが自分に好意を持っているのは知っている。それに応えない自分が、彼女と共に居る権利があるのだろうか。それはひどく残酷な行為なのではないか。アサトはそう思う事がある。

「わたしはね、今の生活が楽しいんですよ」

独り言の様にハルカが言う。

「あなたが居て、カスミちゃんが居て、お仕事があって、ご飯が美味しく食べられて……そんな当たり前の毎日が楽しいんです」

「……」

「あなたがお仕事に行っている間は心配ですけど、無事に帰ってきてくれる度に、わたしはあなたに感謝するんです。生きていてくれてありがとう――って」

本当に嬉しそうにハルカは滔々と語る。あたかも、子供に物語を聞かせる母親の様な慈愛に満ちた表情で。

「全部わたしの勝手な自己満足かもしれません。あなたやカスミちゃんは迷惑に思っているかもしれません。でも、これがわたしの幸せなんです。これが私の世界のなんです。わたしがあなたを好きなのも、そんな自分が好きなだけなのかもしれません。――ね、自己満足でしょう？」

「……いいんじゃないか。ヒトのやることなんぞ、所詮は全部自己満足だ」

ハルカと目は合わせず、アサトは呟くように言葉にした。

「はい。だからわたしは、あなたを好きな自分でいます。それがわたしの……何でしょう？上手く言えませんね」

困った様にハルカは照れ笑いをした。

幸せ。願い。世界。存在意義。生きる理由。

言葉にすれば限りが無い。どれも正解だし、それだけでは足りない気もする。

ふとアサトは思う。自分は何故生きているのだろう。

師であったアヤカと離れ、クノキを失ってからの自分は何を拠り所にして生きてきたのだろう？

いつだったか〈シラヒメ〉のパイロットから問われた。

『どうして生きてるの？』

こうも言われた。

『いつ死んでもいいと思ってる――死にたがり』

彼女の言うとおりだ。

カグヤ・イザヨイ――確かそんな名前のパイロットだった。
漆黒に彩(いろど)られた隻眼(せきがん)の娘。その虚(うつ)ろな瞳――あの目をアサトは知っている。鏡に映る自分の目と同じだ。
そして彼女と共に居た少女。
クノキに良く似た紅(あか)い髪と瞳の少女――フィーア。
二人の姿がアサトの脳裏にちらつく。
かつての自分とクノキの姿が重なる。
もう彼女は隣に居ないのに――
「……本当に、何で生きてるんだろうな、俺は」
「アサト?」
アサトの呟きに、ハルカは危ういものを感じた。

●●●

気付けば足がそこに向かっていた。
いや、正確には意識だけがここにある状態というのが正しい。
足元には『タタミ』が敷(し)かれ、空間は『ショウジ』で仕切られ、照明は『アンドン』でぼんやりと照らされている。限りなく『和』を意識した部屋にアサトは居た。
「――よ」
とアサトが声を掛けた。
そこに居たのは二十歳前後の若い娘だ。『キモノ』と呼ばれる黒い東方大陸の民族衣装に身を包んでいる。黒い髪はポニーテール状に結(ゆ)っており、鋭(するど)い橙色(だいだい)の瞳でアサトと相対している。
凛々しいという表現が良く似合う、美しい娘だ。
だが、ただ単に美人と呼ぶには問題がある。頭の上にはケモノを思わせる三角形の耳、腰から生えている尻尾もそれを思わせる――ヒトではない。
「こうして会う時のお前はいつも不機嫌だな――ヤミヒメ」
ヤミヒメと呼ばれた娘の耳がぴくりと反応した。
ぷいと顔を逸らし「べ――別に、そんなことはない」と否定する。
その表情は不機嫌というより照れ隠しに近い。不器用な性格なのだろう。自分の感情を素直に出すことに抵抗があるのだ。
ヤミヒメ。

アサトの愛機〈ヤミヒメ〉の仮想人格――対人インターフェイスがカタチを為したもの。
それが今ここに居るケモノの特徴を備えた娘の正体である。
ゾイドに性別は無い。だが『彼女』は女性の姿を選択した。それはヤミヒメが女性格である事を意味する。
ここは仮想空間――ヒトとゾイドを繋ぐコミュニケーション手段のための場所だ。
「なあ、ヤミヒメ」
アサトが問う。
「お前はどうして生きてる？」
世間話でもする様に、天気の話でもする様に、気楽な調子で問い掛けた。
「……ヒト特有の愚問だな。生物が生きる事に理由など必要無い。ゾイドに戦う意味を問う様なものだ」
先ほどまでの態度とは一変し、当然の如くヤミヒメは答えた。
「生きる事に疑問を持つのはヒトだけだ。過ぎた知恵など持つから、要らぬ思考をする」
〈コマンドウルフ〉の化身の娘はきっぱりと言ってのけた。
「手厳しいな。ま、お前の言う通りなんだろうがな」
アサトは苦笑した。
「我が主よ。私の存在は貴方のためにある。貴方が望むなら、私は全身全霊をもってそれに応えよう。だが――」
ヤミヒメは少し困った様に言う。
「私にも応えられない事はある」
「すまん。お前にする質問じゃ無かったな」
困った表情のヤミヒメに、アサトは苦笑を重ねた。
そして、わずかな間を置いてヤミヒメが口を開いた。
「ただ言える事があるとするなら、生命の本質――それは求め、抗う事だ」
「『求め、抗う事』――」
「そうだ。どんなにみっともなくとも、情けない姿であっても、最後の瞬間まで生きようとする。ヒトもゾイドもそれは変わらない」
確かな口調でヤミヒメは言った。
「そして貴方と共に在る事――それが私の願いであり、生きる理由だ」
まっすぐにこちらを見据え、強い意思を感じさせる橙色の瞳を向ける。その表情には一片の曇りも無い。
「……そうか」

アサトにはそれが眩しかった。同時にひどく愛おしい気持ちになった。
だから――
「――あ……」
アサトに抱きしめられたヤミヒメが、間の抜けた声を上げた。
抵抗はしない。むしろ力を抜き、身を任せるようにした。
「あるじゃないか――生きる理由」
アサトがヤミヒメの耳元で囁やく。
「……うるさい」
頬を赤く染め、ヤミヒメは拗ねた様に口を尖らせた。
そして――
「私だけではない。クノキの心も、アヤカの遺志も、貴方と共に在る」
だから――
「だから、貴方は生きねばならない。生きていて良いのだ――アサト」
ヤミヒメの言葉は優しい。まるで我が子を想う母親の様であり、弟を気遣う姉の様でもある。
「いつか言ってくれたな。私と貴方は一蓮托生だと」
「ああ」
「その言葉、忘れてくれるな」
「……あいよ」
そう応えてアサトは、ヤミヒメを抱きしめている腕にもう一度だけ力を込めた。

●　●　●

いつも通りの光景。変わらない日常。
そんな益体も無い言葉がアサトの頭を過ぎる。
多少ギクシャクしていたカスミも普段の調子に戻っていた。少なくとも表向きにはそう見える。
アサトはなんとなく彼女を観察してみる。
カスミ・シノザキ。
年齢は十六歳だと聞いている。同年代の少女より小柄で華奢な体型をしている。
灰色がかった銀髪を肩口で切り揃えており、瞳の色は灰色がかった黒だ。肌の色は白く、端正な顔つきと相まって、どこに出しても恥ずかしくない美少女を体現している。

これで愛想が良ければ完璧だが、それを彼女に求めるのは酷な話だ。
それでも同年代の男子からは、さぞかし注目の的になっていただろう。それが彼女の望まぬ結果を生んでしまったのは皮肉だが。
「……何ですか？」
カスミと目が合った。それはそうだろう。これだけじっと見られれば誰だって視線に気付く。
「あー……すまん、見惚(みと)れてた」
冗談半分で言ってみる。
「あらあら。アサト、犯罪ですよ？」
応えたのはハルカだった。微笑は浮かべたままだが、やや非難の色が窺(うかが)える。
確かに二十歳過ぎの男が、十代半ばの少女に手を出せば犯罪だろう。
しかし――
「バカ言うな――純愛だ」
「そうなんですか？　カスミちゃん、あんな事言ってますよ？」
無論ハルカは冗談だとわかった上でカスミに振ったのだが、
「……ダメ人間――」
アサトのカミングアウトは、ばっさりとカスミに両断された。頬(ほお)を赤く染め、照れるなり恥ずかしがるなりするかもしれないというアサトの淡い期待ごと。
「振られちゃいましたねえ」とハルカ。
「ああ、ショックだ」と口だけで言うアサト。
「わたしが代わりに慰めてあげましょうか？」
「結構だ」
やはりいつも通りの日常だ。
そして、そんな当たり前の事に満足している自分にアサトは気付いた。
（幸せはなにげない毎日の積み重ね――か）
らしくない。いつから自分はそんな殊勝(しゅしょう)な人間になったのだろうか？
（どうして生きてるのか――ね）
そんな事はどうでもいいのかもしれない。
生きる事に意味など無い。こうしている今にこそ意味があるのかもしれない。
（言葉遊びだな）
だがそれでも――
（俺は生きてるぞ、カグヤ・イザヨイ――）

変わらない現実に苛立ちながら、どうしようもない世界に抗いながら、それでも生きている。自己満足と自己嫌悪を繰り返しながら、少しずつでも前に進む。

それでいいのかもしれない。

いつかアヤカが言っていた。

『世界は変わる。変えていける』――と。

だから……。

(俺は生きるよ。どんなにみっともなくても、抗ってやる)

そして紅い髪と瞳の少女の姿を幻視する。

(それでいいよな――クノキ)

記憶の中の少女が、薄く微笑んでくれた様な気がした。

第十六話

ヒトには皆、役割がある。
与えられた責任と義務、見返りに得られる権利と自由。
これらを放棄する事は出来る。
だがそれは、この世界との決別を意味する。
ヒトはしょせんこの世界でしか生きられない。
それは理（ことわり）であり、真理であり、世界の仕組み。
ヒトはそれらと上手く折り合いをつけて生きていくしかない。

だが、時にそれらから外（はず）れる者が現れる。
どう生きていいか判らず、迷う者が居る。
生き方が判らない。
生きる事に意味を見出せない。

ある男性は世界を儚（はか）なんで無気力となった。
ある女性はこの世界ごと消えてしまいたいと願った。

彼等の想いは純粋にして純心である。
故（ゆえ）に誰も彼らを否定する事は出来ない。
その想いが世界の終りに繋がるとしても。

いや、だからこそ私は本来なら関わるべきではない。
これは今この世界に生きるヒトとゾイドの問題。
私は傍観者――故に干渉は許されない。

だが私はすでに彼女に関わってしまった。
だからこれは公平を期すための助力だ。

――ちょっとした手心を加えるくらいなら、それぐらいなら許されてもいいでしょう？

第十六話　均衡を保つ者

東方大陸の特色のひとつに雑多な文化体系がある。
そのなかでも大きなイベントが『バレンタイン・デイ』である。
どういった謂(いわ)れがあるのかは不明だが、二月十四日に、女性が意中の男性にチョコレートを贈るというものだ。

愛の告白。もしくは日頃の感謝を込めて。

●　●　●

今日も今日とて〈クスノセ機獣派遣事務所〉のゾイド乗りであるアサト・タチバナは、正午過ぎであるにも関わらず惰眠(だみん)をむさぼっていた。
やや伸ばし気味の黒髪と、現在は閉じられている黒瞳。痩(や)せ型の体躯(たいく)と健康的とは言い難(がた)い顔色から、好青年という言葉とは対照的な位置に居るであろう事は容易に想像がつく。
そんなアサトの部屋に闖入(ちんにゅう)者がひとり――いや、ノックはしているので厳密には違うが――長い黒髪と薄く表情に浮かべた微笑が特徴的な娘だ。
ハルカ・クスノセ。
〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所長であり、アサトの事実上の上司である女性だ。
「アサト、もうお昼過ぎですよ？」
だが、そののんびりとした雰囲気や穏やかな物腰からは『権力者』という単語は似つかわしくない。炊事洗濯など、家事に勤しんでいる姿の方がイメージしやすい。そんな家庭的な雰囲気のある娘だ。
年齢は二十代半ばだろう。
端麗な顔立ちの清楚な美人と言える。
「アサト？」
ハルカが手の届く距離まで近づくものの、アサトは起きる気配は無い。
やれやれといった表情で――それでも微笑は浮かべたままだが――ハルカは思案。
そしてアサトの耳元に顔を寄せる。

「――起きないと、舌、入れちゃいますよ？」
「……どこに入れる気だ？　いや、言わなくていい」
ハルカの言葉に反応したのか、半眼のまま不機嫌そうにアサトは目を覚まして、抗議の言葉を口にした。
「なんだ、ハルカ……今日は何も無いはずだが？」
伸ばし気味の髪を掻き、欠伸をかみころして言う。
それに対してハルカはいたずらっ子の様な笑みを浮かべ、
「ハッピー・バレンタイン～♪」
と、変わらぬ笑みを浮かべたまま言った。
「……」
黙ってカレンダーに目を移すと、アサトは今日が二月十四日である事を確認した。
「ハッピー・バレンタイン……おやすみ」
そういって再び眠りに就こうとする。
が、ハルカがそうはさせない。アサトの被ったシーツを剥ぎ取り、ベッドに乗り込んだ。
「あいさつを交わす日ではないんですよ？　今日は乙女が、秘めた想いを殿方に伝える一世一代の日なんですから」
そう言いつつ、アサトを組み敷き、身動きを取れなくする。
……端から見れば痴女だ。
「判った。判ったから降りろ」
「ふふふ。このまま最後まで行っちゃいましょうか？」
「冗談は顔だけにしろ」
「あ、今のはちょっと傷ついちゃいますねえ」
それでも仕方なくといった風にハルカはベッドから降りた。だがその場からは立ち去らない。
「なんだ？　着替えたいんだが」
「その前に渡しておきたい物があります。言ったでしょう？　今日はバレンタイン・デイですよ」
「ああ。チョコならもらっとくぞ」
手を差し出すアサト。
男は甘いものは苦手という一般論があるが、それこそアサトの嫌いな意見だ。何故なら彼は甘い物が大好きなのだから。
特にチョコレートなどという甘味の代名詞には目が無い。こだわりこそ無いが、チョコ

と名が付けば大概(たいがい)は好きな部類に入る。

するとハルカはスカートのポケットから個別包装された市販のチョコレートを取り出した。手の中に収まるくらいのサイズだ。それをわざわざ開封すると、何故(なぜ)か自分の口にチョコレートの端をくわえ「んー」と唇(くちびる)を突き出してきた。

「くちふふし」

恐らく『くちうつし』と言ったのだろう。ご丁寧に目まで閉じて、両手を胸の前で祈るように組んでいる。

「……」

対するアサトは無言。この状況にどう対処したものか思案している。

「なんて――冗談ですよ」

パリッと音を立てて自らくわえていたチョコレートを食べ、人差し指を唇に当て、挑発的な視線をアサトに送る。

「ふふふ。期待しちゃいました？」

言いながらハルカはチョコレートの付いた唇をなめる。その姿は無邪気な少女の様でいながら扇情的だ。

「はい。こっちが本命です」

言って彼女が取り出したのは、プレゼント用の包装にリボンが付けられた小箱だ。

「出来れば手作りにしたかったんですけど、やはり美味しい方がいいでしょう？」

ハルカは少しばかり残念そうな笑みを浮かべてそれをアサトに手渡した。

ハルカはその家庭的な外見に反して料理がまったく出来ない。

彼女曰(いわ)く『自分にはそういう才能が欠如している』らしい。

それを鑑(かんが)みるに、恐らくは市販の商品なのだろう。

毎年の事なので――ついでに言えば先ほどのやり取りも毎年ある――アサトにしてみれば確かめるまでも無い。

だが、ハルカにしてみればそれが不甲斐無いのか、やや顔を俯(うつむ)けていた。

そんな彼女に嘆息(たんそく)しながら、アサトは「まあ、美味しいに越した事はないな」と言うと、ハルカの顔に手を添(そ)えてこちらを向かせる。

「こっちももらうぞ」

「あ……んっ」

ハルカの返事が来る前に、その唇はアサトのそれで塞(ふさ)がれていた。

「ん……んあ」

当然ながらキスはチョコレートの味がした。

「ごちそうさま」
「もう……ばか――」

●　●　●

着替えを終え、リビングに向かうと、ここ〈クスノセ機獣派遣事務所〉のもうひとりの所員である少女と出会(でくわ)した。
年齢は十五、六歳だろう。灰色(アッシュ・ブロンド)がかった銀髪を肩口で切りそろえた綺麗な少女だ。
体格も小柄で、見様によってはもっと幼く見える。
カスミ・シノザキ。
いっそ美少女と言ってしまっても誰も文句は言わないだろう美貌の少女だ。普段から無口で無表情だが、それすらも彼女にかかれば『儚(はかな)さ』を演出してしまう要素となる。
だが、今日のカスミは普段と少し違っていた。
「……」
それは彼女の表情を見慣れた者でなければ気付かないような些細(ささい)な変化だったが、アサトはそれに気付いた。
相変わらずの無表情だが、どことなく今日のカスミはそわそわしている様に見えた。
「どうかしたか？」
不審に思って訊(き)いてみる。この少女と共に暮らすようになって約半年ほど経つが、こういった様子を見せるのは非常に珍しい。
「……あの、今日、何の日か……知ってますか？」
それだけ言い切ると、やや表情を隠すように下を向く少女。
『今日が何の日か？』――訊かれたのはこれで二度目だ。
「バレンタイン・デイだな」
そこまで言って目前の少女の異変の原因に思い至る。
（まさか……な）
そう思考では否定しつつ、他に理由も思いつかないアサトは、
「もしかして、チョコくれるのか？」
「……！」
対するカスミは、無表情はそのままに顔を赤らめると、後ろ手に持っていた紙袋を差し出してきた。
ハルカとは対照的な初々(ういうい)しい仕草に、アサトは密かに表情を緩(ゆる)める。

「……日頃の感謝の気持ちです。よければ、その……食べてください」
「そうか。ありがたく戴くよ」
そう言って紙袋を受け取る。中身は手作りのチョコパウンドケーキという凝ったものだった。
「……いえ、そんなにたいしたものでは――」
渡すものを渡してしまってから、どうしていいか判らないのだろう。何を言うでもなくその場に立ち尽くしてしまった少女の様子が可笑しくも可愛らしい。
だからアサトは自然とカスミの頭に手を乗せ、サラサラの髪を優しくなでた。
「……あ」
カスミが不思議そうにこちらを見上げるのを見て、しまったと思う。年頃の少女にする行為ではなかっただろうかと……。
「……」
だが、カスミは嫌がるでもなく、やはり少し俯いてアサトの行為にされるがままにされていた。
その様子を見てほっとすると同時に、こういうのも悪くないとアサトは思った。
妹がいればこんな感じなのかもしれない――とも。

●　●　●

気付けばそこに居た。
足元には『タタミ』。部屋を区切る壁には『ショウジ』。そして照明には『アンドン』。
執拗なまでに『和』で満たされた空間。
アサトには覚えがある。ここは現実ではない。アサトの愛機である〈ヤミヒメ〉が仮想人格を用いてコミュニケーションを取るための仮想空間である。
「珍しいな。そっちから呼び出されるのは久しぶりだ――ヤミヒメ」
「ふん。たまにはそういう事もある、我が主よ」
目の前に黒髪の娘が現れて、そっけなく言った。
年齢は二十歳前後。艶やかな黒い髪は胸元まで伸ばされ、後ろ髪は高い位置で一本に纏められている。瞳は橙色。
漆黒の布地に紅いオビの和服に身を包んだ、凛々しくも美しい娘だ。
だが、娘は普通の人間ではない。その証拠が頭頂部付近にある一対の器官だ。ケモノを思わせる、三角形に近い耳がにょっきりと生えている。

そう、彼女は人間ではない。

彼女の『本体』は〈コマンドウルフ〉と呼ばれるゾイドであり、この姿は『彼女』の記憶装置(メモリ)の空き領域(あ)――仮想空間にのみ構築される対人インターフェイスなのである。

「時に、今日が何の日か知っているか？」

ヤミヒメはアサトに向けて訊(たず)ねた。その姿は人間の娘となんら違いはない。

「……バレンタイン・デイだな」

今日、三度目になる質問にアサトはやや恐る恐る答えた。

「その通りだ。聞くところによると懸想(けそう)している相手に、想いを伝える日だそうではないか」

やや時代がかった口調でケモノ耳の娘が言った。

「まあ、間違っちゃいないが……正確にはチョコレートを送る日だ」

「そんなものはあの二人に貰えばよかろう」

アサトの認識もややずれているが、ヤミヒメも返事ににべもない。ちなみに『あの二人』とはハルカとカスミの事だろう。どことなくふて腐れている様にも見える。

「そんなものより、その、なんだ……」

急に言い辛(づら)そうに言葉を濁(にご)すヤミヒメ。

「ここでなら、だから……そういうことも出来るのだぞ――」

先ほどまでの凛とした印象は鳴りを潜め、恥ずかしげに顔を逸(そ)らして言った。

「……ヤミヒメ？」

「……わ、私を――貴方(あなた)の好きにして良いと言っておるのだ！　察しろ！」

……。

気まずい沈黙が場を支配した。

やがて、俯(うつむ)いてしまったヤミヒメを見てアサトが嘆息した。

そして――

「――あ……」

気付けば、和装の娘はアサトの胸に抱きしめられていた

「どうした？　また不安にでもなったか？」

彼女の胸中を察してアサトが口にした。

「……」

ヤミヒメは人間ではない。こうしている姿も仮初(かりそめ)の疑似人格であり、そもそもゾイドに性別は無い――無いとされている。

だがそれでもヤミヒメは『女性格』としてアサトに想いを寄せた。

自分がゾイドである事に引け目は無い。
だが、人間でない事に対する負い目は多少ある。
こうして仮想空間でしかヒトとしてアサトと接する事は出来ないから。
「なあ、ヤミヒメ……俺はこうしていられるだけで満足だ。今だけじゃない、お前が俺を受け入れてくれたから、こうして生きていられると思ってる」
「……本当に、そうか？」
「ああ。戦闘だってそうだ。お前がいるから戦える。それは俺にとって、生きてる理由になる」
兵器として必要とされている――そう取れる言葉だが、ヤミヒメは気にしない。ゾイドの闘争本能は戦いを否定しないからだ。戦っているときこそ、ゾイドはゾイドとして充実する。それはヤミヒメとて例外ではない。
それは、アサトも同じだ。
そして、その充実感を与えられるのもまたヤミヒメしか居ない。
「そうか。そうだったな」
判っている。
だが時折（ときおり）不安になる。
確かめずにはいられなくなる。
ヤミヒメに出来ない事が人間には出来る。
だが人間では出来ない事がヤミヒメには出来るのだ――そう言葉にして欲しくなる時がある。
だからヤミヒメはアサトを呼んだ。
アサトもそれは判っている。
互いに判っているのにひどく不安になる。
「すまん。言わなきゃ伝わらない事もあるわな」
「そ、そうだ。アサト、貴方（あなた）が悪い」
照れ隠しのつもりかケンカ腰のヤミヒメに気を悪くした風（かぜ）もなく、アサトは彼女を抱きしめる腕に力を込める。ヤミヒメはそれきり黙って彼の胸に顔を埋（うず）めた。
それは夢見る乙女の様だった。

●　●　●

「……」

アサト・タチバナの意識はそこで覚醒した。
立て続けに見せられた三つの場面（シーン）――それは『夢』だった。
「如何（いかが）でしたか、『オネイロスの書』の見せた夢は？」
そう問うてきたのは、ひとりの少女だった。
ぎりぎり肩にかからない程度の長さのさらさらの銀髪と、青く澄んだ瞳をした、清楚な印象の少女だ。見た目通りなら十五、六歳だろう。メイド服に包まれた身体（からだ）は細く、少女という生き物ならではの儚（はかな）さを感じさせる。
少女の名はイリアス。
――ここトローヤ神殿の管理・維持をしていると、アサトは説明を受けている。
暗黒大陸テュルク――それはガイロス帝国発祥の地であり、〈大異変（グランド・カタストロフ）〉によって廃墟と化した場所だ。
現在は〈教団〉によって封鎖区画指定とされている。
そしてトローヤ神殿で彼を待っていたのが目前の少女・イリアスだった。
「良い夢を見させてもらったよ。俺のキャラが多少変わってた点を除けば――まあ、良く出来てたかな」
アサトはほんの少しの苦笑を浮かべた。
「演出ですよ。もしくは可能性の問題です。貴方（あなた）が彼女達といつか過ごすかもしれない可能性の世界。あり得ない事ではありません」
イリアスは涼しい笑みを浮かべてそう応えた。
「何でこんなものを俺に見せた？」
「貴方に再認識して欲しかったからです。この世界が、貴方にとって護るに足る世界である事を」
「スケールの大きい話だな。それにしてはスケールの小さな夢だったが」
「あれが貴方にとっての『世界』だという事です。貴方には野望や野心というものが無い。絶大な力を与えられたにもかかわらず、それを行使しようとしない。それはヒトとしては異常な事です」
「……何の話だ？」
「貴方の愛機〈ヤミヒメ〉に託された力。この世界の始まりと終わりを告げる竜のひとつ――〈ドラグーン〉」
何かの台本を読む様にイリアスは言葉にした。
「……君は〈ドラグーン〉を知っているのか？」
「この神殿の書架に保管された『書』に記されている知識であれば、知らない事はありま

せん」

メイド服に身を包んだ少女は、スカートの端をつまみ、優雅に一礼して見せた。

「私はイリアス――この世界の行末を見守る者ですから」

●●●

『長い話になりますから』――そう言ってイリアスはアサトをティータイムに誘った。

うっすらとした照明の瀟洒な雰囲気のある部屋だ。喫茶店を思わせる洒落たテーブルと椅子のワンセット。

そこに座ってティーカップを口元に運ぶと、紅茶の芳醇な香りが鼻腔をくすぐる。

「良い香りでしょう？　紅茶はまず香りを楽しむものですから」

アサトの脇に立つイリアスは楽しそうに給仕をしてくれる。

「君は座らないのか？」

「私はメイドですから――ご主人様？」

「……」

危うく紅茶を噴きそうになるのをこらえて、アサトはポーカーフェイスを維持した。これが世に言う『メイド喫茶』か――そんな事を考えながら。

「いいから、君も座ってくれ。長い話になるんだろう？」

「ふふ、ご主人様がそう仰るのであれば――失礼します」

微笑を浮かべてイリアスもアサトの対面の席に座った。そうしてお互いに紅茶をすする。

ちなみに、アサトが紅茶に角砂糖をいくつも投入したのは見ない振りをした。

（甘くないと飲めないのでしょうか？）

そういえば彼が極度の甘党だった事を思い出した。

「お菓子もどうぞ、紅茶に合うものをセレクトいたしましたので」

「ん、いただくよ」

（まるで少年の様ですね。名うてのゾイド乗りには見えません）

イリアスはそんな事を心中で思った。

誰かとこうしてゆっくりとお茶を飲むは、彼女の密やかな趣味だ。こうして他愛の無い話をしながら、ゆっくりと流れていく時間が好きなのだ。

ティータイムというものはもっと世間に根付くべきだ――それはイリアスの数少ない主張のひとつでもある。

アサトが一杯目の紅茶を飲み干すと、見計らったようにイリアスが給仕をする。

二杯目の紅茶に角砂糖とミルクを投入してかき混ぜると、アサトが本題を切り出した。
「――それで？　俺に何の話があるんだ」
「そうですね……まずはこれをご覧ください」
イリアスが指を指し示すと、テーブルの上に映像が浮かんだ。
「――？」
「空中投影モニターです。この神殿内部はある種の大容量データバンクとなっており、データの呼び出しが可能となっています」
「ハイテクだな」
「はい、ハイテクです」
一般には普及していないであろう技術をそう呼ぶ以外、アサトには出来なかった。
改めて空中に浮かんだ映像に目を凝らす。
「これは……『剣』か？」
映像の中の細長い物体を見て、アサトは訊ねた。
それは確かに『剣』の形をしている。ただし柄（え）の左右に刃（やいば）が付いている。しかも片刃（かたば）だ。
「試作型のレーザー・ブレードです。とある方からお預かりしています」
イリアスが右手の人差指と親指で画像をはさみ、伸ばす様にすると、映像が拡大された。
『ナギナタ』に似ている――とアサトは感じた。パーツの構成は大きく二つに分かれている。柄と、レーザー発振器だ。刃は紅（あか）く。それ以外の部位は黒い。
「〈クロヤシャ〉といいます――〈ヤミヒメ〉にお似合いの武装だとは思いませんか？」
さらさらの銀髪を揺らしながら、イリアスが笑みを浮かべる。
「貴方（あなた）をここにお呼びしたのは、これをお渡しするためです」
「それにしては手が込んでるな。何故（なぜ）、最初からそう言わない。あんな『夢』まで見せたのは？」
「先ほども言いましたが、貴方に再認識していただくためです――この世界が貴方にとって護るに足るものなのか」
「……」
「答えは『イエス』でしたね。ならば貴方にはこれを受け取る資格があります」
「どういう事なんだ？」
アサトの問いかけにイリアスは間を開けて言った。
「――この世界は終りに向かっています」

●　●　●

「……」

「カグヤ・イザヨイ――知っていますね？　私は彼女に『力』を与えました。破壊の力です」

カグヤ・イザヨイ。

白いジェノザウラー〈シラヒメ〉のパイロット。

かつてトローヤを訪(おとず)れ、『バスター・クロー』のデータを渡した娘だ。

彼女の事はイリアスもよく覚えている。

「私はただ彼女に必要な力だと感じただけです。ですが、彼女は禁断の知識に触れてしまいました。〈バースト・ポイント〉の情報です」

アサトは黙って続きを促(うなが)した。

「現在の惑星Ｚｉ(ズィー)には地殻が極端に脆(もろ)くなっている個所があります。そこに大出力のインパクトを与えれば、この星は崩壊します。そこが〈バースト・ポイント〉です。これは本来であれば極一部のヒトしか知らないはずなのです」

だがカグヤは知ってしまった。

「恐らく彼女は『世界の終り(ワールド・エンド)』を実行するでしょう。それが彼女の唯一の願いだから――」

「それで、俺にどうしろと？」

「彼女を止めてください。そして――この世界を護ってください」

「……」

アサトは多少おおげさに嘆息(たんそく)して見せた。

「護る――ね。この世界はそんなに価値があるもんか？」

今度はイリアスが沈黙した。

「カグヤ・イザヨイを止めたとして、それで何が救われるんだ？」

アサトは無表情に続ける。

「あいつのたったひとつの望みなんだろう？　それすら叶えてくれない世界の価値って、いったい何なんだ？」

想う。たったひとつの望みすら許されないとはどんな気持ちだろう？

否。アサトは知っている。誰よりも救いたかった少女を救えなかった無念を。

「この世界ごと消えてしまいたい――俺には判る気がするよ。この世界で生きていくのは容易な事じゃない。何もかもが嫌になる時がある。そんな世界を、俺は護るつもりなんぞない」

いっそ壊れてしまえばいい――アサトはそう言った。

「俺は世界なんて護れない。俺はヒーローでも正義の味方でも無い。この世界の行末なんて知ったことじゃないんだよ」

だが――

「だけどな、この世界もそう捨てたもんじゃない。そう思える様になった」

だから――

「俺が護るのは世界なんかじゃない――『俺の世界』だけだ」

「――それで良いのですよ」

イリアスはアサトの言葉を肯定した。

「神ならぬヒトの身で、すべてを救おうなどという方がおこがましいのです。良いのですよ。貴方は貴方の手の届く範囲で出来る事をすれば――」

「良いのか？　俺は自分の勝手で、自分の護りたいものだけ護るって言ってるんだぞ」

「それが引いては世界を護る事に繋がります。『ついで』で良いのです。貴方の護りたいものを護って、ついでに世界も救ってください」

貴方にはそれが出来るのだから――とイリアスは笑みを浮かべた。

それらの言葉は十五、六歳の少女の口から出るものではない。やはり見た目通りの少女では無いのだろう。

「彼女を――カグヤ・イザヨイを止めてあげてください。彼女も貴方の救いを必要としている者です」

●　●　●

〈クロヤシャ〉を受け取ると、アサト・タチバナはトローヤを去った。

いつもそうだ。自分はこうして訪ねてきた誰かを受け入れ、見送っていく。

「私もいつか、ここを出ていく時が来るのでしょうか？」

誰にともなくつぶやく。

そして――

「いえ、独り言です。何でもありませんよ？」

やはり誰にともなくつぶやいた。

そうして気持ちを切り替える。

こう見えても彼女は多忙なのだから。

第十七話

壊す事が唯一の救いだった。

何かを壊し、砕き、切り裂く快感。
破壊して、駆逐して、殲滅する充実感。

それだけが、あたしの中の破壊衝動を満たしてくれた。
その瞬間だけ、生きている事を実感できた。
それ以外の事に意味など無いと思っていた。

他の何も、あたしの不安を消してくれない。
他の誰も、あたしの空虚さを判りはしない。
この世界そのものが、あたしを否定している様な気がしていたから。

だから、あたしは世界を壊す。
あたしの想いが――世界を壊す。

それでいい。
何も思い悩む必要は無い。
それが、あたしの願いなのだから。

第十七話　死に至る病

草木も眠る丑三時と呼ばれる時刻。深夜の静寂を完膚なきまでに薙ぎ払う咆哮が上がった。

それは破壊の意思を示すものであり、戦端を開く戦鐘でもあった。

――グゥオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

雄叫びを上げたのは一体の白いゾイドだった。ティラノサウルス型の機体に、左右非対称の武装を備えたアンバランスなシルエット。

正式名称〈ジェノフューネラル〉。

ＺＯＩＴＥＣ不正規技術開発部門〈ミラージュ〉が開発した戦闘用ゾイドである。

その機体がホバー走行に更に加速を付け、武装を展開していく。

右の支持腕には『カニバサミ』を思わせるエクス・ブレイカー。頭部にはツノの様なチャージング・ブレード。

それらを構え、白い〈竜葬姫〉が駆ける。

敵対するゾイドに対し、踊る様に、舞う様に、斬り掛かる。

立ちふさがる〈イグアン〉の首をエクス・ブレイカーで斬り飛ばし、飛び掛かってきた〈ヘルキャット〉の胴体をチャージング・ブレードで袈裟斬りにし、こちらの死角に回り込んだつもりの〈ガイサック〉を尾で薙ぎ払う。

一連の動作を流れとし、円舞の様に華麗に舞う。

〈ジェノフューネラル〉――またの名を〈シラヒメ〉という。その戦う姿は、まさに『姫』の如き優美さがある。

〈シラヒメ〉が舞う度に、敵だったものが無意味なガラクタに変わっていく。

ただひたすらに壊していく。

破壊して、粉砕して、蹂躙していく。

「……はぁっ――」

〈シラヒメ〉のコクピットで、パイロットが恍惚とした吐息を漏らす。

壊す度に性的な興奮にも似た快感が沸き起こる。そのまま絶頂に達してしまいそうな感

覚を楽しみながら、夢中で敵を壊し続ける。

パイロットは若い娘だ。年齢は二十代前半。適当に切った様な黒髪は長さが不揃いで、あちこちではねてしまっている。右目は眼帯で覆われているため見えないが、左の瞳は髪と同じで黒い。白い肌に、細い肢体。容姿だけを見れば充分に美人と言える。だが、虚ろな目付きと、彼女が持つ暗い雰囲気が、それを認識しがたいものにしている。

その身に纏うパイロット・スーツとは縁遠い、ゴシックロリータ調の衣服もまた、娘を異様に見せている要因のひとつだ。

カグヤ・イザヨイ。

それが〈シラヒメ〉のパイロットの名である。

「……」

彼女はただ無言で愛機を操る。

言葉は要らない。

壊す事だけが彼女の目的であり、願いだから。

「――カグヤ、〈ゴジュラス〉が一体来るよ。大物っぽい」

〈シラヒメ〉の撃墜スコアが二桁に達した時、カグヤの背後から声がした。そこにはサブ・シートに身を収めた十二、三歳くらいの少女が居た。

可愛らしい少女である。紅い髪と瞳を持ち、人形の様に整った愛くるしい容姿をしている。

だが、その表情はどこか蠱惑的なものが感じられる。年齢と不釣合いな、中身と容れ物が一致していない様な違和感。

少女の名はフィーアという。

何故こんな年端も行かぬ少女がゾイドに乗っているのか？

答えは明確。少女が〈シラヒメ〉のサブ・パイロットだからだ。

主だった操縦はカグヤが行い、索敵や通信管制、機体状況のチェック等をフィーアが行う。これによりメイン・パイロットのカグヤは相当量の負担無しに戦闘に集中出来るという訳だ。

「……〈ゴジュラス〉？」

フィーアの言葉にカグヤは疑問詞で応えた。

「そう〈ゴジュラス〉。ヘリック共和国が開発した戦闘用ゾイド。旧型だけどパワーはあるから気をつけて」

フィーアがサブ・シートにある操作卓を操作し、カグヤの前方のモニターに望遠カメラが捉えた映像を映し出す。そこに表示されたのは銀色の恐竜型ゾイドだ。直立に近い姿勢

は全高二十メートルを越え、その巨体からは威圧感すら感じさせる。
〈ゴジュラス〉が背中に装備している長距離キャノン砲を〈シラヒメ〉に向けた。
同時に〈シラヒメ〉のコクピットに警告音（アラート）が鳴る。ロックオンされている。
「……〈もしくは世界の終わり〉――」
陰々滅々（いんいんめつめつ）とした娘の声が〈シラヒメ〉のコクピットに伝わる――激発音声（トリガー・ヴォイス）だ。
安全装置を解除された左側の武装、それは三本の刃（やいば）によって形成された爆砕兵器――バスター・クローと呼ばれるものだ。
「……〈ワールド・エンド〉――デストラクション」
――ガキィンッ！　という音が鳴り、バスター・クロー〈ワールド・エンド〉の三つの刃が爪の様に開き、基部で回転し、再び閉じてドリル状に形態を落ち着けた。
「……いくよ、〈シラヒメ〉」
カグヤが愛機を移動させると同時に、先ほどまで〈シラヒメ〉が居た地点に〈ゴジュラス〉の砲撃が着弾した。
〈ゴジュラス〉が誇る長距離バスター・ライフル――通称『ゴジュラス・キャノン』。
その威力と射程距離は脅威的だ。
だが、カグヤは動じた様子も無く〈シラヒメ〉を加速させる。
〈ゴジュラス〉への行く手を阻（はば）む敵機を薙（な）ぎ払いながら、砲撃をかわし、時にフリー・ラウンド・シールドで防ぎつつ、悠然と進む。
〈ワールド・エンド〉はまだ使わない。
全ての取り巻きを撃破し、格闘戦距離（クロス・レンジ）に持ち込むべく、〈ゴジュラス〉に迫る。
やがて〈ゴジュラス〉がキャノン砲を排除（パージ）し、接近戦に応じる様に前進して来る。
〈シラヒメ〉と〈ゴジュラス〉の距離は約五メートル。
先手を切ったのは〈ゴジュラス〉だった。その巨体に似合わぬ俊敏（しゅんびん）な動きで尾を打ちつけてきた。
〈シラヒメ〉はそれをかわさず、フリー・ラウンド・シールドで受け止めた。そのままの姿勢でエクス・ブレイカーを展開し、〈ゴジュラス〉の尾を無理矢理（むりやり）引き千切る。
〈ゴジュラス〉が金属質な悲鳴を上げた。バランサーでもある尾を失った事で、姿勢が安定しない。
好機とばかりに〈シラヒメ〉は〈ゴジュラス〉の無防備な背中に、ドリルの様に回転する〈ワールド・エンド〉を突き刺した。バスター・クローの三枚の刃が〈ゴジュラス〉の腹を貫通し、
「……ブレイク――」

カグヤの一言と共に、〈ワールド・エンド〉の刃が、爪を開くように展開した。
内側から爆発する様に〈ゴジュラス〉の上半身が千切れ飛び、下半身と決別する。一歩、二歩と前進して下半身がくず折れた。傷口からはゾイドコアの欠片が散見される。
「……もう終わり？」
カグヤが周囲を一瞥して言った。
「みたいだね。周辺に敵影無し。任務完了だよ、カグヤ」
「……そう」
フィーアの反応に、短く応えるカグヤ。熱に浮かされた様に、まだ身体が火照っているのを感じる。
ふと、大破した〈ゴジュラス〉に視線を向ける。このゾイドも、敵として出会わなければ、自分を好きになってくれただろうか？
そんな益体も無い思考がカグヤの頭を過ぎる。
「……」
だとしたら何だ？　何が変わる？
何も変わりはしない。
自分は破壊者だ。
ただ壊せばいい。快楽のおもむくままに。
そのために生きている。
だから――

●
●
●

声の様なものが聴こえた気がして、アサト・タチバナは何気なく視線を上に向けた。
黒い瞳と、伸ばし気味の黒い髪。年齢は二十代前半だろう。
覇気というものが微塵も感じられない雰囲気の、言ってしまえばそれだけが特徴の青年だ。
「――？」
奇妙な感覚に誘われて顔を上げてみたが、視線の先には薄汚れた天井が見えるだけだった。
深夜。場所はムラサメ・ファクトリーが所有する工房のひとつ。その応接間にアサトは居た。
目の前にはテーブルがあり、湯気を燻らせるコーヒーカップが二つ置かれている。ひと

つは無論、アサトの分だ。ミルクと砂糖がたっぷり入れてあるため、色が濁(にご)っている。
「――アサト、聞いてるのか？」
もうひとつのカップの持ち主が、不機嫌そうに言った。
アサトと同年代くらいの青年だ。長い茶色の髪を後ろで縛っており、一見すると女性にも見える整った顔立ちをしている。ノンフレームの眼鏡(めがね)の奥の茶色の瞳は理知的で、着ている服が作業着で無ければ、そのままファッション誌のモデルをやっていてもおかしくないルックス。
言ってしまえば美形だ。
くわえ煙草(たばこ)と着崩した作業着姿からは、チンピラの様な雰囲気も感じさせるが、それすらも『ワイルドだ』と評する女性の声は多い。
シュウスケ・アイダ。
若くしてムラサメ・ファクトリーの工房のひとつを任されている技術屋(メカマン)であると同時に、アサトの数少ない友人と呼べる存在でもある。
「……すまん。まったく聞いてなかった」
というアサトの返答に、シュウスケは不機嫌そうに形の良い眉をひそめた。
「お前の使う装備の説明だぞ。ちゃんと聞け」
「原理とかはどうでもいいんだよ。ちゃっちゃと要点だけを言え」
同じゾイドに携(たずさ)わる者であっても、『作る側(シュウスケ)』と『使う側(アサト)』との間に、明らかな温度差があった。
二人が話しているのは、アサトの愛機である〈ヤミヒメ〉の新装備についてだった。
試作型ツイン・レーザー・ブレード。
装備名〈クロヤシャ〉。
先日のトローヤ神殿来訪の際に、イリアスと名乗った少女から託された近接戦闘兵装である。
信頼性の確認のため、シュウスケの工房に持ち込まれた〈クロヤシャ〉は螺子(ねじ)レベルにまで徹底的に分解・解析された結果、現在では再現不可能な『失われた技術(ロスト・テクノロジー)』である事が判明した。
その際、製作者の名前であろう『Kamishiro』と刻印されたプレートが見つかった。
「これがどれだけ優れた技術で作られたか、興味が無いのか？」と主張するシュウスケに対し、
「解析不能なんだろう？　お前に判らない事が俺に判るか。使えりゃいい」とアサトはまるで取り合わない。

それを責める事は出来まい。多くの『使う側』の人間が道具の構造や理論など、まるで理解せずに、それでも問題なく使いこなしているのだから。

逆に『作る側』のシュウスケにしてみれば、仕組みの判らない物を平然と使う人間の心理が理解出来ない。

『どうしてこうなるのか？』――幼少の頃から旺盛だった知的好奇心が、彼を技術屋という今に至らせる結果となったのだから。

「それで？　その『カミシロ』っていうのは何者なんだ？」

アサトは技術自体には興味は無い。だが、それを作った人間には多少の関心を示した。

「とある流派の隠し名の様なものだ。技術屋でその名前を知らない奴はモグリだな。ちなみに当代の継承者は金髪碧眼の美女だという噂だ」

「……ほう？」

アサトも男だ。美女と聞けば多少の興味は湧く。

「気になるだろ？」

「ああ、美女だけな。技術はどうでもいい」

「……ちなみに〈クロヤシャ〉をうちで作ろうと思えば、同じコストで〈カグヅチ〉が十本は作れるな」

「そんなにか!?」

技術や金銭感覚には疎いアサトでも、驚かずにはいられない。

「どうだ、少しは恐れ入ったか？」

「ああ、びっくりだ」

それから約数分に渡るシュウスケの〈クロヤシャ〉の技術解説を右から左に聞き流し、

「問題なく使えるんだろ？」

と、アサトは口を挟んだ。

「それは勿論だ。威力と安全性は保証する」

アサトの問いに対し、シュウスケは自信を持ってそう応えた。

「基本的には〈ヤミヒメ〉の口にくわえて使用しろ」

作業着の胸ポケットから新たな煙草を二本取り出し、それを吸い口で繋げて、口でくわえて見せる。〈クロヤシャ〉のモデルの積もりだろう。

〈クロヤシャ〉は刃を二つ持つ、いわゆる『ナギナタ』に近い形状をしている。柄の両端からレーザー発生器が伸びており、刃にあたる部分にレーザーを発生させるというものだ。

「そして、この〈クロヤシャ〉にはもうひとつの形態がある。二枚の刃を束ねて、前方にレーザーを集中展開させて敵に突っ込む――突撃形態だ」

シュウスケは口の両端にくわえていた二本の煙草の向きを揃えて、前方に突き出して見せた。

「名付けて――『バスター・スラッシュ』」

と、得意げに言う茶髪の美青年に対し、アサトは、

「……それは確か〈ライガーゼロ　シュナイダー〉の技じゃなかったか？」

「御明察」

ニヤリとして、シュウスケは口にくわえていた煙草の一本をポケットに戻し、もう一本に火をつけた。

この男、ある種の映像マニアであり、それに影響を受けては妙な『新兵器』を開発する悪癖がある。〈レヴァンティン〉と〈シュランゲバイセン〉もその一例だ。

更に問題なのは、これらが実戦でも使える事だ。時折、妙な『新兵器』を開発しては、そのテストをアサトにやらせようとする。〈アイアンコング〉用に開発したという巨大な『ハンマー』を見た時には、さすがのアサトも絶句した。

「どのみち、またあの妙なジェノブレイカー・クラス……〈シラヒメ〉だったか？　あれとやりあうんなら、これくらいの武装は必要だ」

一転して、真面目な表情で言うシュウスケ。

「〈クロヤシャ〉とは別に、対〈シラヒメ〉用に秘密兵器も開発中だ。その名も――〈Gクラッシャー〉」

「〈Gクラッシャー〉？　物々しい名前だな」

「まあ、明日には完成する。楽しみにしておけ」

そう言うとシュウスケは吸いかけの煙草を灰皿に押し付け、部屋を後にした。

●
●
●

「昨夜未明、〈教団〉のとある施設が襲撃されました」

〈クスノセ機獣派遣事務所〉の応接間に通されて、開口一番に修道服に身を包んだ娘が言った。

年齢は二十代半ば。セミロングの髪は金色。瞳の色は紺碧。

『貴族の令嬢』――そんな表現が似合う、優雅な気品を持った娘だ。

名前をマヘリア・メリルという。

現在の惑星Ｚｉを事実上管理している組織――〈エイミス教団〉のシスターである。

「これが襲撃してきた敵機の画像です」

マヘリアの隣に座っていた少女が、画像をプリントアウトした紙をテーブルに並べていく。

マヘリアと同じ修道服を着た少女だ。年齢は十七、八歳だろう。

くすんだ赤色の髪は癖が強く、短めに揃えている。勝気そうな黄色の瞳。肌の色は褐色で、顔には薄っすらとソバカスが浮かんでいる。

万人受けする美人ではないが、その強気な雰囲気には愛嬌が感じられる。

ミゼット・レミントン。

マヘリアの補佐を担当している『妹』である。

〈教団〉には『姉妹制度』と呼ばれる制度があり、マヘリアとミゼットはそのパートナーなのである。

「これは……〈シラヒメ〉ですか？」

ミゼットが並べた画像に眼を通したハルカ・クスノセは、どこか緊張感に欠けた、のんびりとした口調で言った。

年齢はマヘリアと同程度だろう。長い黒髪と黒い瞳という、東方大陸ではもっともポピュラーな特徴を備えた娘だ。

「けど、武装が違います。前回の戦闘では〈ジェノブレイカー〉に換装されていた筈（はず）です。……これは、バスター・クロー？」

ハルカの発言に応えたのは灰色（アッシュブロンド）がかった銀髪を肩口で切り揃（そろ）えた、怜悧（れいり）な印象の少女だった。年の頃なら十五、六歳。小柄で儚（はかな）げな雰囲気の少女である。

名前をカスミ・シノザキという。

「お二人とも正解ですわ。この機体は間違いなく〈シラヒメ〉と同一のものです。どういった経緯でロスト・テクノロジーであるバスター・クローを入手したのかは不明ですが、その威力も本物です」

マヘリアは、上半身を無惨に吹き飛ばされた〈ゴジュラス〉の画像を示して言った。

「……酷いですね」

無表情な中にも痛々しいものを感じさせる声音で、カスミはそう口にした。

「施設を襲撃した理由は？」

「コンピュータのデータバンクにアクセスした痕跡がありました。恐らくは欲しい情報があったのだと、我々は判断しています」

「欲しい情報？」

ハルカの問いかけに対し、ミゼットはマヘリアの顔を一度確認して、再び口を開いた。

「〈バースト・ポイント〉に関する情報です」

「〈爆裂地点（バースト・ポイント）〉……ですか？」
耳慣れない単語にハルカは疑問符を浮かべた。カスミも同様だ。
「これからお話することは〈教団〉でも極一部の人間しか知らされていない事です。なので、他言無用にお願いしますわ」
気品のある表情はそのままに、マヘリアは立てた人差し指を口に当てて言った。
「〈世界の終わり〉に関わるお話ですから」

●　●　●

サイト・シティ。
ミヤコノ・シティに程近い位置にある地方都市のひとつである。規模や人口数はそれに劣るが、治安は安定しており、商業的にも盛んな都市である。
街には活気があり、様々な商店が立ち並ぶ大通りは、喧騒で賑わっていた。
「……」
多くのヒトが行き交う雑踏の中で、カグヤは何故自分がこんな場所に居るのか、疑問に思っていた。彼女の纏うゴスロリ衣装に目を止める者も居るが、そんな視線にはまるで気付いていない。
見渡す限り、ヒト、ヒト、ヒト――
こんなにも世界はヒトで溢れている。
忙しそうな者。楽しそうに笑っている者。暗い表情の者も居る。
それぞれにそれぞれの生活があり、それぞれの事情で生きている。
「……」
だが、それもあとわずかだ。自分はこの世界を壊そうとしている。
世界の終わりを迎えれば、この光景も永遠に失われる。
全てが無に還る。
それは全てのヒトに平等に与えられる終焉の時――
「――カグヤ？」
自分を呼ぶ声に、ふと我に返る。
傍らに居るのは無論、フィーアだ。紅い髪と瞳が目を惹くが、それ以外は普通の少女に見える。
「……なに、フィーア？」
「もう。またぼーっとしてる」

頬を膨らませ、怒っている表情をしてみせる少女に、カグヤはどう反応していいか判らず、取り敢えず謝る事にした。

「……ごめん」

「これはデートなんだから、ちゃんとエスコートしてよね」

デートとは男女でやるものだ。それくらいの認識はカグヤにもあったが、そんな事は言うだけ無駄だと経験的に知っている。

「あ――あのお店いいかも。入ってみよう？」

そう言ってはフィーアがカグヤを引っ張る。その繰り返しだ。これが本当にデートであるのなら、ウインドウ・ショッピングと言えなくもない。

気に入った服や小物を見つけては目を輝かせるフィーアの姿は、本当に普通の少女と変わらない。だがそれに反して、カグヤが持つ筈の荷物の数は増えない。

「……どうして買わないの？」

気に入ったのなら買えばいい。自由に使えるだけの金銭は〈教授〉から貰っている。なのにフィーアはそれをしない。

「だって、カグヤが可愛いって言ってくれないんだもん」

「……どれも似合ってたよ？」

「違うの！　私は可愛いよって言って欲しいの！」

「……」

正直、カグヤにはフィーアが試着した服も、手に取って見せた小物も、全て同じに見えた。似合うと言ったのは本当だが、可愛いかどうかは判らなかった。それがフィーアには不満なのだろう。

だが――

「嘘。ごめんね、困らせて」

少女の雰囲気が一変する。表情から笑みが消え、少し悲しそうな顔をする。

「カグヤは退屈？」

「……フィーアは楽しいの？」

「私は楽しいよ。こうしてカグヤと歩いてると、普通の女の子みたいじゃない？」

「……」

何と返していいか判らなかった。

返すべき言葉をカグヤは知らなかった。

「カグヤが普通の価値観なんかに興味が無いのは知ってるよ。でも、実際に経験して、普通に楽しい事があるんだって知って欲しかった」

フィーアは続ける。
「そしたら、カグヤの気も変わるんじゃないかって、ちょっとだけ期待したんだ」
カグヤの願い――それは世界の終わり。
「誤解しないでね。私の気持ちは変わらないよ。カグヤと一緒なら、この世界が終わるのも構わない……けど、やっぱりカグヤには一緒に生きて欲しい。この世界はカグヤを否定なんてしてないんだから」

『この世界は君を否定なんてしていない』

それは仮想空間で出会ったシラヒメにも言われたことだ。
「……なら、どうしてあたしはこんなにも憂鬱なの？」
何故？　どうして？
「……あたしは、間違っているの？」
――判らない。
「……判らないよ、フィーア」
「カグヤ……」
沈黙。
潮が引く様に喧騒が遠くなっていく。まるで周囲が何も無い闇に閉ざされた様に静かになる。
気分が悪い。気が滅入る。
鬱々とした意識が思考の海へと沈んでいく。
――死にたい。
どうしようもない衝動に駆られる。
「私じゃ駄目なのかな――？」
少女の声に、再び意識が浮上する。優しい声。それでいて、どこか寂しげな響き。
「……フィーア？」
「ううん、何でもない。ごめんね、変なこと言って」
視線を合わせたフィーアの表情は、いつも通りの笑顔だった。
「ねえ、お腹すかない？　そろそろ昼食にしよ」
胸が痛んだ気がした。罪悪感の様なものを感じた気がした。
――この気持ちは何？
「……」

カグヤには判らなかった。それが自分に欠けた感情であることに。
「――あれ？」
ふいに、フィーアが何かに気付いたように駆け出した。
少女の背中が遠のいていく。まるで自分の元から去っていく様に。
正体の判らない不安に駆られる。このままフィーアが消えてしまう様な、恐れにも似た焦燥（しょうそう）――
だから――
「……待って」
――置いていかないで。
「……待って――」
――独りにしないで。
「フィーア……！」
名前を呼んだ。自分をパートナーだと言ってくれた少女の名前を。
「――カグヤ！」
フィーアの声はすぐ近くから聴こえた。三メートルと離れていない。
誰かに抱きついた格好のまま、こちらを振り返っている。カグヤはその人物に見覚えがあった。黒い髪と瞳をした、どこか気怠（けだる）い雰囲気の青年だ。
「……カグヤ・イザヨイ――？」
青年が言った。
カグヤは青年の名前を知っていた。
「……アサト……タチバナ……」

第十八話

かつての自分がそうだった。
生きる事に苦痛を感じ、世界が終わればいいとさえ思った。
満たされない空虚さ。
底知れない喪失感。
漠然とした未来への不安と焦燥。
緩慢（かんまん）な死への欲求。

絶望――それは死に至る病。

だが、それでも生きていれば何かが変わる。
気付けば手に入っているものがある。
ほんの少しの心がけで絶望は希望に変えられる。

多分、それは――

第十八話　希望に続く病

こぢんまりとした落ち着いた雰囲気の小料理店。

四人がけのテーブル席。アサト・タチバナは、目の前に置かれたパスタを、野菜を選り分けながら食べていた。

年齢は二十代前半。黒髪黒瞳の、どこか気怠い青年だ。

「アサトって野菜嫌いなの？　子供みたい」

小鳥のさえずりの様な声がアサトの耳朶をくすぐる。

アサトは顔をややしかめて、隣の席に座っている少女を見た。

名前は確かフィーアだったと記憶している。見た目は十二、三歳くらいの、紅い髪と瞳をした可愛らしい少女だ。

「……大きなお世話だ」

そう言ってアサトは食事を再開した。麺に絡まった野菜が鬱陶しい。

「ダメだよ。好き嫌いしちゃ、大きくなれないんだから」

子供を叱る母親の様な台詞だと思いながら、アサトは再び少女に視線を向ける。

「ごもっとも。だがな、正論だけじゃどうしようもない事もある」

「そんな言い訳は却下だよ。はい、あーん」

アサトが選り分けた野菜を箸でつまみ、フィーアが食べさせようとする。

「やめろ。恥ずかしい」

「照れなくてもいいのに。はい、あーん」

「要らん。お前が食え」

「お前じゃないよ、フィーアだよ。ね、呼んでみて？」

「……フィーア」

「うん！　なになに？」

「何でもない」

「あは！　なんかカップルの会話みたいじゃない？」

楽しそうにフィーアが笑う。

つい釣られて笑いそうになる、無邪気な笑みだ。

ほんの数分前、今居る店の前で突然、アサトはフィーアに抱きつかれた。そのまま離れようとしない少女に誘われて食事を共にすることになり、現在に至っている。

何故フィーアが自分にこうも懐(なつ)いてくるのかは判らないが、アサトの心情は複雑だった。
(やはり、クノキに似ている――)
紅(あか)い髪と瞳というヒトにはありえない色彩が、いやでも記憶の中の少女を想起させる。
「……」
「ん？　何、アサト？」
アサトの無言をどう思ったのか、フィーアが小鳥の様に首を傾(かし)げる。
アサトには訊(き)きたいことがあった。だが、それをすることが出来なかった。禁忌に触れてしまいそうで、少女の顔色が曇(くも)ってしまいそうで、訊けなくなってしまう。
だから話題を変えてみることにした。
「フィーアは、今――幸せか？」
「え……？」
「よく笑うから、毎日楽しいんだろうな、と思ってな」
アサトの問いにフィーアは、一呼吸置いて答えた。
「……うん、楽しいよ」
「そうか」
「だって――」
ためる様に間を置いて、
「――私にはカグヤがいてくれるから」
そう言った紅い髪と瞳の少女の笑顔はまぶしかった。
だからアサトは、フィーアの言葉が真実だと思えた。思いたかった。
そういうものがあるのだと信じたかった。

●　●　●

カグヤ・イザヨイは、ただ無言でアサトとフィーアの会話を聞いていた。
漆黒のゴシックロリータに身を包んだ若い娘だ。恐らくはアサトと同じく、二十代前半だろう。黒い髪と瞳。右目は眼帯に覆われている。
「どうしたの、カグヤ？」
「……別に」
フィーアの問いかけに、カグヤは味気なく応えた。

束の間の沈黙が降りる。
周囲からは彼等がどういう関係に映っているだろうか。
若い男女と少女がひとり。それが同じテーブルに座っている光景は、たまたま同席になった他人同士というのが相応しい。
現に彼等はそういう関係だ。親しい訳でもなく、むしろ敵対関係に近い筈だ。
それがこうして同じテーブルで食事をしている状況に、しかしカグヤは違和感を感じなかった。
ひどく落ち着いている。
アサトもこちらを警戒している様子は無い。
「ねえねえ、アサトは何でこの街にいるの？」
「〈ヤミヒメ〉の新装備のチェックをしに来た。この街に知り合いの技術屋が居る」
「ふーん、そうなんだ。私達はね、最後の休日を満喫してたんだ」
「……何で最後なんだ？」
知っている。先日のトローヤ神殿来訪の際に告げられた〈世界の終り〉に関する話だ。
だが、アサトはあえて訊ねた。
「だってね――もうすぐ世界は終わっちゃうから」
「……どういう意味だ？」
「言ったとおりだよ。この世界はもうすぐ終わりを迎えるの」
フィーアは何でもない事の様に言った。
対するアサトは特に動揺した様な様子は無い。彼は知っているからだ。
「……驚かないのね、アサト・タチバナ」
「驚いてるよ。あんたがまともに喋った事にな――カグヤ・イザヨイ」
「……そう」
「ああ、びっくりだ」
カグヤとアサトの視線が交錯する。
互いに無言のまま、時間だけが経過していく。
「本当なんだな」
「……そうよ」
ふう――と一息吐き、アサトは言った。
「イリアスに会った」
「……そう、あなたも」
アサトは首肯した。

イリアス。
その名前はカグヤも覚えている。以前に出会い、バスター・クロ―のデータをくれた少女だ。
「彼女に頼まれたよ、『世界を救ってくれ』ってな」
「……世界を、救う？」
一瞬、意味が判らなかった。アサトの言葉が異国の言語の様に聞こえた。
陳腐（ちんぷ）な台詞だ。この世界に救うだけの価値などありはしないのに。
それでも、この男は止（と）めようとするだろうか？
いや、アサトは自分と同じ『死にたがり』だ。歓迎こそすれ、邪魔はしないだろう。カグヤはそう考えていた。
だが――
「――止めて欲しいのか？」
アサトの言葉は否定でも肯定（こうてい）でもなかった。
「……？」
カグヤは、アサトが何を言っているのか判らなかった。
アサトは無表情に言う。
「本気で世界を終わらせたいのか？」
「……」
「本当は誰かに止めて欲しいんじゃないのか？」
やはり気怠（けだる）い表情は変えずに青年は言った。
――そうなのだろうか？
考えもしなかった。
――本当にそうか？
〈バースト・ポイント〉の候補地の割り出しは、おおまかに終わっている。今頃〈教授〉が、バスター・クロー〈ワールド・エンド〉の最終出力調整をしている筈（はず）だ。あとは行動を起こすのみ。
なのに……。
「いつか俺に訊いたな。どうして生きてるのか」
沈黙に飽きたかのように、アサトが口を開いた。
「考えてみたよ。どうして生きていられるのか」

「……聞かせて」
「なんて事はない。俺は今の生活がそれなりに気に入ってるらしい」
「……」
「どうしようもない世界だと思うよ。この世界は辛い事や悲しい事が多すぎる。嫌な事だらけで、時々吐き気がする」
その通りだとカグヤは思う。だからこの世界は終わりを迎えるべきだとも。
だが――
「けどな、生きてりゃ何とかなるもんだ。そう思えるようになってきた」
「……だから？」
「この世界は――そう捨てたもんじゃない」
「……」
「それが俺なりの生きる理由だ」
それきり、また場が沈黙する。
周囲の喧騒をよそに、そこだけ空間が切り離された様に静かになる。
やがて――
「……つまらないわ」
ぽつりとカグヤが言った。
「……そんな、ありきたりな言葉が聞きたかった訳じゃない」
期待外れだった。
この男なら、あるいはカグヤが思いもしない答えをくれたかもしれない。
そんな勝手な落胆が胸中を占める。
「つまらない答えで悪かったな。けど、それでいいんだ。俺達は、そんな当たり前の事にすら気付けずにいたんだからな」
「……？」
アサトの言い回しに引っかかりを覚えた。何が言いたいのだろう？
「使い古された言葉だと思ってたけどな、大事なものは意外と近くにあるもんだよ。ただ気付いてないだけだ」
そう言うとアサトは、視線をフィーアに向けた。
「え、私？」
きょとんとした表情で、紅い髪と瞳の少女は自分を指差した。
「フィーアは世界が終わってもいいのか？」
アサトが訊ねた。

「――いいよ。私はカグヤと一緒なら」
その問いにフィーアは即答した。こちらを向き、柔らかな笑みを浮かべる。
まただ。カグヤは、その笑顔に胸が痛んだ気がした。
「……フィーア」
「何？　カグヤ」
「……」
言葉が出ない。
何を言っていいのか判らない。
（何？　この気持ちは……）
さっきもあった。締(し)め付けられる様な胸の痛み……。
フィーアが自分の元から去ってしまう事に、言い知れぬ恐怖を覚えた。
（あたしは……フィーアが居なくなるのが怖い？）
自覚はあった。フィーアと居ることで、安心を感じている自分が居た。
フィーア。
〈エミュレーティング・オーガノイド・システム〉として生み出された少女。
自分を好きだと言ってくれた。
（あたしはそれが嬉しかった……？）
一緒に居ると言ってくれた。
（あたしはそれに救われていた……？）
いつも笑いかけてくれた。
（あたしは……フィーアと生きていたい……？）
判らない――自分の気持ちが判らない。
どうしたいのか。
どうすべきなのか。
そんな事は考えずに生きていた。
いや、考える事を放棄してきた。
破壊という代償行為に身を委(ゆだ)ね、快楽の赴(おもむ)くままに戦ってきた。それではいけないのか？
（代償行為？　違う……）
何が違う？　何も違わない。
（あたしは……）

●　●　●

「……」

カグヤが黙り込んだのを潮に、アサトは席を立つことにした。言いたい事は言った。あとはカグヤ次第だ。

「じゃあな」

それを意外そうな表情でカグヤは見ていた。

「……あたしを捕まえないの？」

「俺にはそんな権限も義務も無い」

「……あたしの首には賞金が懸かっているはずよ」

「金には不自由してない。それとも捕まえて欲しいのか？」

「……」

「……黙るなよ」

面倒くさい女だ――アサトはそう思った。

「そうだ――これを渡しておく」

思い付いた様に財布を漁る。出てきたのは一枚のカードだった。

「〈クスノセ機獣派遣事務所〉？」

フィーアがカードに記された文字を読み上げる。それは滅多に使わない事務所の名刺だ。

「気が向いたら連絡しろ。出来れば、世界が終わる前にな」

「……どうして？」

「あんたとの決着がまだついてない。せっかく新兵器まで用意してるんだ。無駄にしたくない」

「……判らないわ。あなたはあたしと同じだと思ってた。けど、判らなくなった」

「当然だ。そう簡単に判った気にされて堪るか」

「……そう。そうかもしれない」

「じゃあ、な」

伝票を手に取り、今度こそレジへ向かおうとする。

背後から呼び止める声は、もうなかった。

●　●　●

残された名刺に視線を落とし、カグヤは黙考した。

アサトの意図が判らない。
本気で連絡すると思っているのだろうか？
それとも、やはり世界が終わってしまってもいいのだろうか？
「どうするの、カグヤ？」
フィーアが楽しそうに訊(き)いて来た。
「……そうね」
連絡するのも面白いかもしれない。
世界の命運を彼に委(ゆだ)ねるのもいいかもしれない。
自分ではもう、決められないから。
「……連絡してみようか。『この日、世界を壊します』って」
その日まで生きてみるのもいい。
そんな感情がカグヤに芽生え始めていた。
それはささやかな期待の灯火(ともしび)。
絶望と言う名の病に生まれた、ほんのわずかな希望だった。

第十九話

私が私として存在する理由――
私が私で居られる理由――

それは私を受け入れ、必要とし、共に寄り添ってくれる者が居るからだ。
アサト――我が最愛の主（あるじ）。
アヤカ――かつての友。
クノキ――理解者にして半身。
そして――私に関わってくれる多くのヒト達……。

私の存在は彼等によって支えられている。
私を認め、好意をもってくれるヒト達によって私は生かされている。
私は幸せなゾイドだろう。
少なくとも、そう感じられるくらいには恵まれている。

だから私はこの世界が好きだ。
愛おしいと思えるヒト達が生きている、この世界が好きだ。

第十九話　託されたもの

「殺人的な加速だ……！」

〈ヤミヒメ〉のコクピットで、アサト・タチバナは絞(しぼ)り出す様に言った。

すでに速度計(スピード・メーター)は振り切れており、現在の速度は判らない。

そこへ――

『正確な速度の計測は不可能ですが、先ほど音速を突破。なおも加速中です』

女性を思わせるクノキの無機質な機械音声(マシン・ヴォイス)が淡々と告げた。

アサトは『音速』という単語の意味が、一瞬、理解出来(でき)なかった。それは陸上を走る物体に用いる単位ではない。

そう――〈ヤミヒメ〉は海上数メートルの低空を飛んでいた。

その姿は通常の形態とは明らかに形状が変わっている。長大なブースター・ユニットを二基背負(せお)い。両前脚には長方形のマグネッサー・システム・ユニット。両後脚にはアシスタント・ブースター。腰部のハイブリッド(H)・スラスター(T)・バインダー(B)は外(はず)され、別のスラスター・ユニットが装備されている。

長距離侵攻用緊急展開装備――通称〈イダテン〉。

その名の通り、緊急を要する作戦用に開発された追加兵装ユニットである。

過剰なまでに取り付けられたブースターで加速させ、本来は飛行用に開発されたマグネッサー・システムを姿勢制御のみに用いることで機体を安定させるという、無謀極まりないコンセプトの基に開発された経緯を持つ。

とある人物から〈ヤミヒメ〉に送られた試作装備であり、送り状には『Sardence』とだけ明記があった。恐らくは製作者の名前だろうと思われる。

（――ったく、何を考えてこんな物を造った!?）

アサトはコクピットの耐加重(G)システムでも緩和(かんわ)しきれないGに耐えながら心中で悪態をついた。声に出さないのは、舌を噛みそうだったからだ。

しかし彼の考えは間違っていない。

陸戦ゾイドである〈コマンドウルフ〉にブースターを取り付けて、ロケットの如(ごと)く飛ばそうなど狂気の沙汰(さた)だ。緊急に長距離を移動する必要があれば〈レイノス〉なり〈レドラー〉なりの空戦ゾイドを飛ばせばいい。いくら汎用性が高いとはいえ、〈コマンドウルフ〉

にそこまでの機能を求めるのは酷というものだ。
だが何を思ったか、それを可能とした者がおり、それを必要とする事態が起こってしまったのは皮肉としか言い様がない。

●
●
●

時は三十分ほど前に遡る。
『――事態は急を要します』
アサトが受話器を受け取るなり、電話相手の女性は言った。ちなみにハルカとカスミは出払っている。
「……あんたらしくないな、マヘリア。何事だ？」
女性――〈教団〉のシスターである処のマヘリア・メリルの声音にただならぬものを感じ、アサトは端的に訊いた。
『迅速に解決して頂きたい仕事があります。これは特例法第一条第二項が適用されます。つまり――』
「俺に拒否権は無い。そうだな」
マヘリアの言葉に被せる様にアサトは応えた。
〈教団〉が定める法のひとつに『特例法』がある。おおまかに言えば、緊急事態における無条件の〈教団〉への協力義務であり、民間のゾイド所有者はこれに従わなければならない。
「――で、何があった？」
アサトはさも面倒だといった雰囲気を隠すことなくマヘリアに続きを促す。
『理解が早くて助かりますわ。今から五分前にある企業の社長令嬢を誘拐したという犯行声明が出されました。要求は身代金という極めてシンプルな内容です』
「それで？」
よくある話だとアサトは思った。
『アサトさんには人質救出のための陽動をお願いします』
そしてマヘリアから伝えられた敵勢力の居場所と、作戦開始時間を聞かされてアサトはマヘリアの正気を疑った。
「……その場所までの移動手段は？　それ以前に、あと一時間以内でどうやってそこまで行く？　飛行ゾイドを使うべきだろう」
アサトの至極まっとうな意見に、マヘリアは理路整然と返答をして見せた。

まず現在の惑星Ｚｉ（ズィー）における飛行ゾイドの絶対数の少なさがある。よしんば飛行ゾイドを配備出来（でき）たとしても、敵との交戦時間が極めて短く、陽動の効果を成さない。
敵と同じ陸戦ゾイドによって戦場をかき乱さなければならないのだ。
『先日話していた長距離侵攻用緊急展開装備……確か〈イダテン〉と言いましたか。それがこの任務に最適と判断して貴方（あなた）にお願いしているのです。異存はありませんわね』
「おおありだ。あれはヒトが使うもんじゃない。俺はあれで死に掛けたんだぞ」
だが、マヘリアはアサトの意見に取り合わない。
『無茶でも何でもやって頂きます。他に手段がないのですから』
有無を言わさぬ口調で言われれば、もうアサトに反論の余地はない。
「判った。三十分で用意する。その間に必要なデータを送信しといてくれ」
『すでに送信済みです。それから――あと二十五分でお願いしますわ』
「……了解」
アサトは嘆息した。

●
●
●

そして時間は現在に戻る。
「クノキ……状況は？」
ブースターによって加速され、ガタガタと振動が伝わる〈ヤミヒメ〉のコクピットで、アサトはようやくそれだけ口にした。
『まもなく敵勢力を有効射程圏内に捉（とら）えます。接敵まで三分』
アサトの問いにクノキの機械音声（マシン・ヴォイス）が、やはり淡々と応える。
すでに音速を超えている〈ヤミヒメ〉は、海を割りながら水上をホバー走行している。
目的地は東方大陸のはずれに位置する孤島。そこに今回の事件の首謀者達が立てこもっている。
厄介なことに連中はゾイドで武装している。それ故（ゆえ）にアサトに依頼が来た訳だが。
「作戦開始時刻は？」
『時間合わせ、完了しています。作戦開始時刻まであと一分』
「あいよ」
操縦桿から離していた手を戻し、火器管制（ＦＣＳ）システムを起動させる。
そして敵機を目視すべく前方に目を向けた瞬間――
「――なっ!?」

敵機を視認した瞬間、照準固定と同時に〈ヤミヒメ〉の機体は敵機とすれ違っていた。
相対するものが無い水上を進んでいたため忘れていたが、現在の〈ヤミヒメ〉の速度は音速を超えているのだ。ならば有効射程圏内に敵機を捉え、照準・射撃を行う間に敵機との距離がゼロになってしまってもなんら不思議はない。
僥倖だったのは、すれ違いざまに発生した衝撃波で敵機が吹き飛んだ事だろう。
「滅茶苦茶だ……！」
機体を急旋回すべくアサトは操縦桿を引き起こし、フット・ペダルを思い切り踏み込んだ。すると、操縦者の意思を反映すべく右の背部ブースターが基部を軸に前方を向き逆噴射を行い、左のブースターが点火を止める――畢竟、〈ヤミヒメ〉は物理法則に逆らうことなく急激な一八〇度ターンを決め、敵機を前方に捕らえた。
『敵勢力を目視にて確認。ハンマーロック・タイプが計八機です。……マスター、無事ですか？』
クノキが淡々と敵情報を告げるのに対し、アサトは強烈な目眩と嘔吐感に苛まれていた。
「……生きてるよ」
それだけ言うのが限界だった。
アサトの視界がふらつく。
『反撃――来ます』
そんな主の体調など我関せず、自律型戦術支援サポート・ユニットは戦況を伝えていく。
「――くっ！」
再びブースターを噴かせる。大出力の推力の発生により、〈ヤミヒメ〉が跳ぶ――いや、飛んだ。
複雑な軌道を描きながら数十発のミサイルが〈ヤミヒメ〉に殺到する。それを機体を無理矢理空中でひねり、次々とかわしていく。
耐加重システムによってある程度は緩和されているとはいえ、コクピットにいるアサトは堪らない。すさまじい加重が身体を襲う。
とてもではないが反撃する余裕がない。
だから――
「任せる――当てろッ！」
『了解。ＦＣＳ、アイ・ハブ・コントロール』
クノキがＦＣＳを預かると同時に、背部に唯一装備された二丁の二連装パルス・レー

ザー・ライフル、計四門が火を噴いた。
正確な射撃で次々と〈ハンマーロック〉のゴリラ型の機体が撃破されていく。恐るべき精密射撃だ。
だがアサトは驚かない。クノキの高速度情報処理能力は彼が誰よりも知っている。
そこへ――
『――アフロディーテよりアサルトへ。こちらの作戦は完了。そちらも制圧されたし』
クノキのものとは違う少女の声が通信機から発せられた。マヘリアと同じ『アフロディーテ』のコードネームを持つ少女――マヘリアの妹であるミゼット・レミントンのものだ。
ぶっきらぼうな口調に、コードネーム『アサルト』こと、アサトはくすんだ赤毛の少女の顔を思い出す。
人質救出はつつがなく終わったのだろう。
「アサルト了解。仕上げに入る」
短く通信を終え――それどころではない――残敵の掃討（そうとう）に移るアサト。
すでに十体以上居た〈ハンマーロック〉は、その数を三体にまで減らしていた。
「〈イダテン〉、排除（パージ）。アイ・ハブ・コントロール！」
『このまま戦闘を続けた方が効率的かと思いますが？』
「俺が何もしてないだろ」
『了解』
弾丸の様に飛行していた〈ヤミヒメ〉が横滑りしながら着地をする。勢いを殺すため脚部が地面を削り、弧（こ）を描く。
そして機体が安定する前に長距離侵攻用緊急展開装備〈イダテン〉が切り離されていく。
普段のシルエットを取り戻した〈ヤミヒメ〉が身を震わせ、口にくわえていたツイン・レーザー・ブレードを展開する。
「〈一刀両断〉――」
『〈クロヤシャ〉起動（イニシャライズ）。安全装置解除（セーフティ・リリース）。使用可能です（スタンバイ・レディ）』
アサトの激発音声（トリガー・ヴォイス）に、クノキの承認が続く。
「切り裂け――〈クロヤシャ〉ッ！」
試作型ツイン・レーザー・ブレード〈クロヤシャ〉。
〈イダテン〉と同様に、『Kamishiro』なる人物によって造られ、〈ヤミヒメ〉に送られた近接戦闘用試作兵器である。
漆黒の剣、その刃（やいば）に紅（あか）い光がきらめく。
疾走する〈ヤミヒメ〉とすれ違いざまに、〈クロヤシャ〉によって二体の〈ハンマーロ

ック〉の上半身が次々に切断され、宙に舞う――恐るべき切れ味だ。
「――あと一体」
レーダーで敵機の位置を確認する。
「モード変更――バスター・スラッシュ！」
アサトの音声入力に従い、〈クロヤシャ〉が形態を変える。ナギナタの様だったシルエットが折りたたまれ、巨大な剣（バスター・ソード）を形成する。〈クロヤシャ〉の第二形態である。
大振りな刀身に紅い光（レーザー）の刃を発生させる。
〈ヤミヒメ〉が駆ける。
最後の〈ハンマーロック〉は完全に戦意を喪失し、逃走に入っていた。
「逃がすか」
やや危ない笑みを浮かべつつ、アサトは愛機を突撃させる。相当、鬱憤（うっぷん）が溜まっていたのだろう。
巨大な紅（あか）い光の剣が〈ハンマーロック〉の胴体を貫いたのは、次の瞬間だった――

●
●
●

仕事を終えたアサトはマヘリアの手配した大型航空母艦〈ホエールキング〉の格納庫に居た。
快適だ――加重も振動もない移動がこんなにも心地いいものかと改めて実感する。
「だいぶお疲れの様ですわね」
声を掛けてきたのはセミロングの金髪碧眼（へきがん）の娘だ。年齢は二十代前半から半ばといった処（ところ）か。その整った容姿と気品は『貴族の令嬢』という例えがよく似合う。
マヘリア・メリル。
今回の仕事をアサトに依頼した張本人であり、〈教団〉のシスターでもある。
「……おかげさまで、最新装備のいい実戦テストをさせてもらったよ」
半眼で皮肉を言うアサト。
それに対しマヘリアは、
「それは重畳（ちょうじょう）ですわ。特別手当も出ますし、大儲（もう）けですわね」
と、どこ吹く風だ。
このシスターに何を言っても無駄だとアサトは経験で知っているので、それ以上は何も言わない。
すると――

「あんたみたいなボンクラが〈教団〉に貢献出来るんだから、感謝しなさいよね」
そう言ったのはマヘリアの横に並んだ、癖の強いくすんだ赤毛の少女だ。年齢は十七、八歳だろう。肌の色は褐色で、顔にはうっすらとソバカスが浮かんでいる。
ミゼット・レミントン。
〈教団〉の『姉妹制度』におけるマヘリアの『妹』である。
「うるさいぞ、赤毛」
うんざりした口調でアサトは少女に言った。
「赤毛って言うな！　このボンクラ‼」
「お前がボンクラを撤回したらな」
「そんな日は永久に来ないわよ！」
激昂するミゼットを他所に、アサトはマヘリアに訊た。
「それはそうと――〈クロヤシャ〉と〈イダテン〉……あれはどこの誰が造った？」
「調査はしてみましたわ。ですが、誰がどこで造ったものかは判りませんでした。言えることがあるとするなら、どちらも〈ヤミヒメ〉に対する善意の協力者――といった処ですわね」
「……」
「それだけ〈ヤミヒメ〉が愛されているゾイドだという事では不満ですか？」
気品のある笑みを浮かべて言うマヘリアに対し、アサトは愛機を見上げた。
「だとさ――〈ヤミヒメ〉？」

――ウォオオオオオオオオオオンッ！

姫の名を冠する漆黒の〈コマンドウルフ〉が吠いた。
その姿が恥らう乙女の様にアサトには見えた。
「……」
そして、ふと思い出す。サイト・シティで出会い、話をした二人の事を。
カグヤ・イザヨイ。
フィーア。
あの日から一週間。小さな火種はあれど、世界は今日もつつがなく続いている。
「――マヘリア、〈シラヒメ〉はまだ見つからないのか？」
「……はい。〈教団〉も手は尽くしているのですが、なかなか尻尾をつかませてくれません」

マヘリアはカグヤと面識があるらしいが、詳しい経緯（いきさつ）は聞いていない。
「そうか」
詮索（せんさく）するつもりは無い。だからアサトはそれ以上は口にしなかった。
あの日渡した事務所の名刺を、まだ彼女達は持っているだろうか？
そんな事を考える。
「世界の終りか――」
かつてはアサトも、そんな日が来ればいいと思っていた。こんな世界は終わるべきだと。
だが今は、ほんの少しだけこの世界で生きるのも悪くないと思っている。
だから――
（〈ヤミヒメ〉……お前の力を貸してくれ）
心でそう呼びかける。

『――心得た。我が最愛の主（あるじ）よ』

アサトには〈ヤミヒメ〉の化身の娘の声が、そう応えてくれた様に聴こえた。

第二十話

――あたしの世界は歪んでいる。

暗くて深い奈落の底。
光が届かない闇の中。
手探(てさぐ)りをしながらでなければ進めない、絶望の淵(ふち)に居た。

――あたしの世界は歪んでいる。

矛盾と悪意に満ちている。
この世界で生きるのは苦行だ。
まともでは居られない――死にたくなる。

――あたしの世界は歪んでいる。

ただ普通で居たかった。
ヒト並みの幸せが欲しかった。
優しい温(ぬく)もりを求めていた。

――あたしの世界は歪んでいる。

しかしそこに――一筋(ひとすじ)の光が差した。
抱きしめてくれる少女が居てくれた。
それから何かが変わり始めた。

――あたしの世界は……。

第二十話　あたしの世界

薄暗い照明がひとつだけ灯(とも)された個室で、カグヤ・イザヨイは目を覚ました。窓が無いために時間は判らない。なので、枕元に置かれた時計を見た。起床予定時間まであと一時間ある。

判るのは、左半身に暖かく柔らかな感触がある事だ。

そちらに視線を移すと、鮮烈な紅(あか)い髪の少女が眠っていた。年の頃なら十二、三歳の可愛らしい少女である。体格は小柄で、小さな手でカグヤの腰に抱きついている格好だ。寝顔には安らかな表情が浮かんでいる。

フィーア。

それが紅い髪の少女の名だ。

カグヤのパートナー。

特殊な技術によって生み出されたにも関わらず、天真爛漫(てんしんらんまん)で明るい少女。時折(ときおり)浮かべる蠱惑(こわく)的な笑顔が特徴と言えば特徴だが、見た目には普通の女の子に見える。

ちなみにフィーアはいつもカグヤと一緒に寝ている訳ではない。時々、思い付いた様に『一緒に寝てもいい？』とカグヤの部屋を訪れる。拒(こば)む理由もない。だからカグヤはフィーアをベッドに招き、共に眠る。

最初は違和感があった。自分以外の誰かが、手が触れられる距離に居る。

だがそれも最初だけだった。いつしかカグヤは、フィーアが側に居る――居てくれる事に安堵する様になった。

だから、こうして同じベッドに眠っている少女の存在が心地良い。自分を慕(した)ってくれる、隣に居てくれることが嬉しいと感じているのかもしれない。

「……」

無言でフィーアの顔にかかっていた紅い髪を、そっとはらう。閉じた瞳と長いまつ毛が露(あらわ)になる。

幸せそうな寝顔だ――とカグヤは思う。

自分と一緒に寝ているからそうなのだろうか？

そうだったら嬉しい。

何となくだが、そんなことを考える。

そしてフィーアを起こさない様に、そっと少女の小さな身体を抱きしめた。
ずっと前――まだ子供だった頃。両親の温もりに守られていた頃。母親にそうしてもらった様に、優しく抱きしめた。

『大事なものは意外と近くにあるもんだよ。ただ気付いてないだけだ』

サイト・シティで出会った時に、アサト・タチバナがそんな事を言っていた。
それからずっと考えていた。いや、気が付いたと言うべきかもしれない。
それは――
（ねえ、フィーア。あなたがあたしの大事なものなの？）
もし、そうだとしたら。もし、そうであるのなら。

『この世界は――そう捨てたもんじゃない』

あの青年はそんな事も言っていた。
（あたしの世界には……フィーアが居る。だったら、この世界も悪くない？）
よく判らない。判らなくなってきた。
けど――良い。
今はフィーアの存在だけで満たされている。ゾイドに乗っている時の安心感とは違う。何かを破壊する充実感とも違う。もっと暖かなもの……。
だからカグヤは、気持ち良さそうに眠る少女に告げた。
「……おやすみ、フィーア」

●　●　●

それから二度寝する気にもならず、普段着であるゴシックロリータに着替えると、カグヤは格納庫に向かった。
不思議だ。起床する度に感じていた憂鬱な気分を、最近、感じなくなっていた。これが『何かが変わる』という事なのだろうか？
よく判らない。
だが悪い気はしない。
だからだろうか、格納庫に居た〈ライガーゼロ〉に、彼女は気まぐれに声を掛けた。

「……おはよう」

すると――

――グゥルルルルル。

と、〈ライガーゼロ〉は嬉しそうに喉を鳴らした。

金属生命体であるゾイドも眠る。

機獣化されたゾイドは、システムをシャットダウンされれば休眠状態になり、起動させれば目を覚ます。だが、この〈ライガーゼロ〉はそれらを無視して、勝手に目覚めて、カグヤに返事をした。本来であればあり得ない。

これもまたカグヤが〈魔女〉と呼ばれる所以だ。

『君はゾイドに愛されるヒトなんだよ』

いつか〈シラヒメ〉の対人インターフェイスの青年に言われた。カグヤと関わったゾイドは彼女に好意を持つ――と。

それはこの〈ライガーゼロ〉も例外ではない。そっと身を伏せ、頭部をカグヤに寄せてくる。そして装甲式のキャノピーを開いた。

「……乗せてくれるの？」

カグヤの問いに、白いライオン型ゾイドは、また喉を鳴らして応えた。

コクピットにカグヤが座ったのを確認すると、キャノピーが閉じ、〈ライガーゼロ〉は外に駆け出した。

少し散歩をするのも悪くない。そう思い、カグヤは操縦桿を握りもせず、〈ライガーゼロ〉の好きにさせることにした。

●　●　●

〈ライガーゼロ〉との散歩を終え、格納庫に帰って来たカグヤを迎えたのは、四十過ぎの中年だった。白髪交じりのぼさぼさ頭と、よれよれの白衣。

〈教授〉――と呼ばれている、如何にも研究以外には興味がなさそうな風体の男性だ。

「よお。お前さんがこんな朝早くに起きてるのは珍しいな」

「……目が覚めたから」

〈教授〉の呼びかけにカグヤはそう応えた。
「そうか。こっちは徹夜明けでな、〈ライガーゼロ〉が消えてたから、盗まれたのかと思ったよ！」
「……」
ここは〈ＺＯＩＴＥＣ（ゾイテック）〉社の秘密基地のひとつだ。並の警戒システムではなく、外部からの侵入者にゾイドを奪われるなど、到底あり得ない。冗談のつもりだろう。テンションが妙に高いのは徹夜明けだからだろうか。
「そんな事よりだ。〈バースト・ポイント〉の割り出しが終了したぞ」
「……そう。〈ワールド・エンド〉の方は？」
「出力調整は終わってる。リミッターを外（はず）せば最大出力が出せるようにしてある。ただし、使えるのは一度だけだ。一度使えば壊れちまうからな！」
そういって〈教授〉は上機嫌に笑った。相当、アドレナリンが出ているのだろうとカグヤは思った。
「あとは決行するだけだ。それでこの世界は終りだよ」
「……そう」
待ちわびた時が来た――にも関わらず、カグヤの心は晴れなかった。
むしろ、明るみかけた世界が曇（くも）った様に感じた。
「どうした？　お前さんの宿願だろう？」
〈教授〉は徹夜明けのハイになったテンションを引っ込め、訊（たず）ねた。
対するカグヤは無言で下を向いた。
「何かあるなら話してみろよ。私に応えられる事なら応えんでもないぞ？」
「……少し、悩んでる」
ぽつりと、呟（つぶや）くようにカグヤは言葉にする。
「……この世界を、壊して良いのか――」
カグヤの途切れ途切れの話を聞き、〈教授〉は、
「私は精神科医でもカウンセラーでもないから適切なアドバイスなど出来ないが、そういう時は大いに悩め。悩むのが嫌になったら悩むのをやめろ。そして今出来（でき）る事をしろ」
と言った。
「……それで、何か解決するの？」
「しないな。ただ、悩んでも何も解決しない。なら現実逃避でもいいから別の事をした方が建設的だろう？」
「……」

「私は研究に行き詰ると、別の研究をする。そうしているとな、自然と元の研究に戻れるんだ。良い解決案が浮かんだりしてな」

「……そういうもの？」

「ああ、そういうものだ」

だからな、と〈教授〉は続けた。

「お前さんも悩んでいるなら、大いに悩め。悩むのに飽きたら別の事をしろ。そうやって現実逃避ばかりしていると私の様な大人になれる」

そう言い残して〈教授〉は格納庫を去った。

含蓄（がんちく）があるのか無いのか判らない言葉をカグヤは心で繰り返した。

（あたしに、今、出来る事――）

何だろう？

何がしたいのだろう？

そんな事をぼんやりと考えながら、カグヤは自室に戻る事にした。

フィーアはもう起きているだろう。これから一緒に食堂に行って朝食を摂（と）ろう。それから今日、何をするか話そう。午後からは予定も無いし、出かけるのも良い。

そんな他愛も無い考えが次々に浮かんでくる。不思議だ。悩むのをやめると、こんなにも前向きな思考が出来るのかと。

そうなると自然と自室に向かう脚も速くなる。

だが、それが良くなかった。ちょうど向かいの角を曲がって来た職員と、それなりのスピードでぶつかってしまった。

ぶつかったのは若い女性職員だった。彼女はぶつかった相手が〈ミラージュ〉の〈魔女〉である事に気付くと、「す、すみませんでした！」と言って、カグヤの返事も聞かずに去ってしまった。

特に気にする事もなく歩みを再開しようとして、カグヤはふと足元に紙きれを見つけた。さっきの女性職員が落としたのだろう。なんとはなしに紙面を見て、カグヤの思考が停止した。

『エミュレーティング・オーガノイド・システムに関する検査報告』

紙面のタイトルにはそうあった。

〈エミュレーティング・オーガノイド・システム〉――それはつまりフィーアの事だ。細かな数値や専門用語の類の意味は判らなかったが、報告書の最後にはこう書かれていた。

『被検体の生命維持は、恐らく残り九十日程度と考えられる。何らかの対処の必要性を認める』

何だこれは？
『被検体』というのはフィーアの事か？
フィーアの命はあと三ヶ月で尽きる？
フィーアが居なくなってしまう？
フィーアが――死ぬ？
フィーアが……。
……。

「……フィーア――」

はらりと報告書がカグヤの手から落ちた。
カグヤは自分の世界が壊れ始める音を聴いた気がした。

第二十一話

手にしたのは破壊の力。
世界を壊し、終わらせる力。

想いも、願いも、喜びも。
痛みも、怒りも、悲しみも。

全部なくなってしまえばいい。
全部消えてしまえばいい。
あたしの世界には必要ない。

――それとも、必要ないのはあたし？

それが世界の答えなら、こんな世界にはいられない。
世界があたしを否定するなら、あたしも世界を否定する。

だから、あたしは世界を壊す。
あたしの想いが――世界を壊す。

第二十一話　デストルドー

重苦しい空気が充満した会議室。そこには十数名の人間が席に着いていた。
皆、一様に壮年と呼ばれる年齢で、胸元には〈ＺＯＩＴＥＣ（ゾイテック）〉社の重役である事を示すバッジがあった。
「――では、本日の議題に移らせていただきます」
進行役であろう男が言った。
「我が社の不正規技術開発部門――通称〈ミラージュ〉について、皆様の意見を募（つの）りたいと思います」
「好きにやらせ過ぎなのではないか？」
待っていたとばかりに別の男が言った。
「私はよくやっていると思いますが？　〈ＥＯＳ〉と〈ジェノフューネラル〉の実戦データに、バスター・クローの実用化。好きにやらせているだけの実績は挙げています」
そう言ったのは別の壮年の男だ。
「やり方に問題があると言っているんだ。現に〈教団〉の連中の動きが活発になっている」
「確かに……今月だけで五カ所のダミー施設が潰（つぶ）されている。連中が〈ミラージュ〉を捕捉するのは時間の問題かもしれませんね」
「彼等が摘発（てきはつ）されれば、いずれは我々に害が及ぶ」
「痛くもない腹を探られるのは勘弁して頂きたいですな」
「優先すべきは機密保持では？」
「しかし――」
次々と会議室を言葉が飛び交う。
意見は様々で、一致をみる様子は無い。
やがて、益を得ないやり取りに飽きたかのように、ひとりの男が立ち上がった。
年齢は五十歳を越えているだろう。よく見れば、胸元に付けたバッジのデザインが彼だけ少し違っている。
ざわざわと会議室が色めき立つ。「社長……」という単語が口々に囁（ささや）かれる。
「〈ＺＯＩＴＥＣ〉社社長としての意見を述べさせて頂く。〈ミラージュ〉……彼等はやり過ぎたと言わざるを得ない」

「……」

社長と名乗った男の言葉に、会議室の全員が沈黙をもって続きを促した。

「彼等は世界の終りに関する情報を知ってしまった」

「……どういうことでしょう？」

恐る恐るといった体で役員のひとりが訊ねた。

「詳細については重役会の方々にもお話することが出来ない。これは〈エイミス教団〉内においても最重要機密とされている。おいそれと話せる内容ではない。ただこれだけは言える。〈ミラージュ〉をこのまま野放しにすれば比喩でも何でもなく――世界は終る」

またも会議室がざわつく。

それはそうだろう。突然『世界が終る』と言われて理解出来るはずもない。

だが、社長の言葉や表情には危機感と呼べるものが感じられた。冗談や、事実を大げさに言っている訳ではないのだろう。

「私は社長権限をもって、ここに〈ミラージュ〉の即時解体・撤収を提案する。納得のいかない方も居るだろうが、承認して頂きたい」

つかの間の沈黙が会議室に降りる。

そして一人、また一人と列席した役員たちが承認と書かれた札を上げていく。

社長権限と言われれば反対できる者など居ない。実質、それは命令と同義であり、自分の立場を危うくしてまで〈ミラージュ〉に肩入れする必要も無いからだ。

いつでも切り捨てることが可能な部門。故に〈ミラージュ〉は不正規とされ、公式には存在しないとされている。

「では、満場一致をもちまして本会議案は可決とさせて頂きます。何かご意見のある方は？」

進行役の男が一同を見渡して言った。

「具体的にはどうされるのです。彼等は独自の戦力を保有している。おとなしく解体を聞き入れるとは思えませんが？」

「保安部門をすでに待機させてある。〈ミラージュ〉の現在位置も把握させている。三時間以内には制圧出来るだろう」

役員の質問に社長は即答した。

何の事はない。会議を始める前から、彼は事を進めていたのだ。この会議自体が、組織の体裁をとりつくろった形式上のものでしかないのは誰の目にも明らかだった。

「……」

もはや意見を述べる者は居なかった。

誰もが詳細な事実を知ることなく状況に流されるしかない。

「それでは――現時刻をもって〈ミラージュ〉の全権限を剥奪。即時解体・撤収を開始する」

●　●　●

『それでは――現時刻をもって〈ミラージュ〉の全権限を剥奪。即時解体・撤収を開始する』

「――とまあ、これが約三十分前のお偉方の会議の内容だ」

スピーカーから流された録音内容を指して言ったのは〈教授〉と呼ばれる男だ。

ＺＯＩＴＥＣ社不正規技術開発部門〈ミラージュ〉の最高責任者である。

彼の前には約十数人の人間が居た。男も居れば女も居る。年齢はまちまちだが、おおよそ二十代から三十代だろう。〈ミラージュ〉のスタッフである。

「確かに我々のやろうとしているのは世界の終りだ。止められてしかるべき悪行だろう。だが私は見てみたい。それが現実に可能かどうかを」

〈教授〉は続ける。その目はどこか遠くを見ている様で、見る者を不安にさせる。

「君達はよくここまで付き合ってくれた。ありがとう。あと二時間程でここも制圧されるだろうが、我々の意思はカグヤとフィーアが継いでくれる。残された時間をどう過ごすかは好きに選択して欲しい。以上だ」

そう言って〈教授〉は発言を終えた。

その場を動こうとする者は居なかった。

●　●　●

静まり返った格納庫。

壁際に申し訳程度に設置されたベンチに二人の人間が居た。

ひとりは十二、三歳くらいの少女だ。紅い髪と瞳の少女。

もうひとりは二十代前半くらいの娘だ。黒い髪と、ひたすらに黒いゴシックロリータを身に纏った娘。

少女はベンチに腰掛け、自分の膝に娘の頭を乗せている。

娘は少女の膝に抱かれ、胎児の様に全身を丸めている。

ただ静かに、そこだけ時間が流れるのを放棄した様に、穏やかな静寂に包まれている。

あたかも世界にたった二人だけが残った様に。

「……ねえ、フィーア」

漆黒の娘が呟く様に言った。

右目は眼帯で隠されているため見えないが、左の瞳も黒い。肌の白さ以外はどこまでも黒で統一されている。

「なに？　カグヤ」

フィーアと呼ばれた紅い少女が娘の名前を呼んだ。その表情は慈愛に満ち、我が子を想う母親のそれに近い。

「……あたしは、どうして生きてるのかな？」

カグヤと呼ばれた娘は感情のこもらない平淡な口調でフィーアに訊いた。それは質問と言うより確認に近い。

「私が一緒に居て欲しいって想ってるからだよ」

そう、それは確認だ。カグヤが自分の存在を認識するための。

「……あたしは、このままでいいのかな？」

自分の存在を肯定し、受け入れてもらうための儀式。

「いいよ。カグヤはこのままでいいんだよ」

だから紅い髪と瞳の少女は、漆黒を身に纏った娘にそう応えた。

「……あたしは、生きてていいのかな？」

時折、どうしようもなく不安になる。自分はこの世界に生まれてはいけなかったのではないかと思う。

フィーアはそれを知っている。カグヤが何を想い、何を言って欲しいのか、知っている。

だから――

「カグヤは生きてていいんだよ。私はカグヤが好きだよ。大好きだから。ずっと一緒にいるから」

フィーアがカグヤの黒い髪を優しく撫でながら言った。

好きだから。

一緒だから

だから生きていていいのだと。

「……そう」

やはり呟く様に、カグヤは身体を起こして言った。

「もういいの？」

「……もう少し」

そう言うとカグヤは、フィーアの小さな身体を正面から抱いた。少女の膨らみの乏しい

胸に顔を埋(うず)める。
「くすぐったいよ、カグヤ」
「……嫌？」
「ううん。嫌じゃない」
そう言いながらフィーアもカグヤの身体(からだ)に腕を回す。ゴシックロリータの衣装の下の身体は驚く位に華奢(きゃしゃ)で、フィーアは少し不安になる。
儚(はかな)くて。
抱きしめたら折れてしまいそうで。
「カグヤは痩(や)せ過ぎだよ。ちゃんと食べないと本当に死んじゃうよ？」
「……死ねないよ。痛いのや苦しいのは嫌いだから……だから死ねない」
そんな自分が生き汚いとカグヤは思う。
いっそ楽に死ねないかと考えたこともあったが、そんな方法は無かった。どんな死に方でも苦痛が伴(ともな)う。それが嫌だった。
死に方を探していた。
そんな時にゾイドに出会った。
ゾイドの操縦席に座ると心が落ち着いた。圧倒的な何かが自分を護ってくれている気がした。
今思えば、それはカグヤがゾイドに愛される性質を持っていたからだと判る。
それはある意味で魔性だ。故(ゆえ)にカグヤはこう呼ばれる。
『ゾイドを惑わす魔性の女』――〈魔女〉と。
だが、そんなこともうどうでもいい。
もうすぐ世界は終わるのだから。
「……そろそろ行こうか、フィーア」
カグヤがベンチから立ち上がろうとする。だがフィーアはカグヤの身体に腕を回したまま離れない。
「……フィーア？」
少女は応えない。俯(うつむ)いたまま顔を上げようとしない。
「……どうしたの？」
カグヤがフィーアの顔をのぞき込むと、その表情は苦悶に歪(ゆが)んでいた。
「……フィーア？」
「ううん、何でもない……大丈夫だから」
気が付いたように笑みを浮かべ、フィーアはその場を取り繕(つくろ)った。

「行こう、カグヤ」
そうしていつもの様に蠱惑的に笑って見せた。
いつもの様に。
変わる事なく。
「……」
だからカグヤは無言で頷いた。
そして、格納庫で自分を待っている愛機に視線を送る。そこに居るのは一体のティラノサウルス型ゾイドだ。
〈ジェノフューネラル〉。
白を纏いし破壊と殺戮の〈竜葬姫〉。
愛称は〈シラヒメ〉。
その橙色のカメラ・アイと目が合う。
『――それでいいのかい？』
〈シラヒメ〉の仮想人格――対人インターフェイスの『声』が、カグヤの心に問うてくる。
「……」
それに無言で応じるカグヤの表情には、何の感情も浮かんでいない。
観念した様に〈シラヒメ〉がコクピットを開いた。
フィーアが後部座席に座るのを確認して、カグヤもコクピットに乗り込む。
その時、格納庫に居たもう一体の機獣と視線が合った――カグヤに懐いていた白いライオン型ゾイド〈ライガーゼロ〉だ。
置いて行かれる子供の様な、寂しげな目を向けてくる。
「……さよなら――」
一瞬の逡巡の後、カグヤはつぶやく様に〈ライガーゼロ〉に向けて告げた。

●　●　●

結論から言えば、ＺＯＩＴＥＣ社上層部の思惑は筒抜けだった。〈ＺＯＩＴＥＣ〉社の保安部門〈クゥエル〉の特殊部隊が〈ミラージュ〉の制圧に乗り込んだ時には、すでに〈シラヒメ〉は起動していた。
投降勧告には耳も貸さず、〈クゥエル〉のゾイドによる包囲網の一角を崩し、突破した。
「追撃しろ。最悪、〈ジェノフューネラル〉は破壊しても構わん。パイロットもだ」

〈クウェル〉の指揮官が、ダークグレーに染められたスティラコサウルス型ゾイド〈ダークホーン〉のコクピットから指示を出す。

残りの戦力でも、彼我兵力差は七対一。そのうち一体は〈バーサークフューラー〉だ。並のゾイドでは太刀打ち出来まい――そう彼は考えていた。

しかし次の瞬間、背を向ける〈ジェノフューネラル〉に向けて荷電粒子砲の発射態勢を取っていた〈バーサークフューラー〉が、新たに現れた白いライオン型ゾイドの体当たりを受けて地面に叩きつけられていた。

「〈ライガーゼロ〉だと⁉　誰が乗っている⁉」

色めき立つ指揮官の男に対し、

『〈ライガーゼロ〉のコクピットに動体反応なし。無人です！』

と、情報支援に控えていたディメトロドン型ゾイド〈ゲーター〉のパイロットからの通信が届く。

「馬鹿な……」

ゾイドがヒトの命令なくして勝手に動くなど、通常であればあり得ない。

そんな指揮官の常識など構う事なく、戦場に乱入して来た〈ライガーゼロ〉は倒れた〈バーサークフューラー〉のコクピットを叩き潰し、

――グゥルルルオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！

狂った様に咆哮を上げた。

コクピットを潰された白いティラノサウルス型ゾイドはもう動かない。

『――ひぃっ！』

『――い、嫌だ……俺は死にたくないッ！』

『――指示を、指示をください！　う、わぁぁぁッ⁉』

次々に部下から通信が入る。誰もが突然現れた〈ライガーゼロ〉を恐れていた。精鋭ぞろいの〈クウェル〉のゾイド乗り達が、怯えていた。

無人の〈ライガーゼロ〉から発せられる気迫は、狂気に満ちていた。

――『ここから先には行かせない』

そんな意思の様なものを男は感じた。

「……これが〈魔女〉に魅了されたゾイドの姿か――」

無人の〈ライガーゼロ〉の正体に気付き、彼は苛立たしげに独りごちた。

●
●
●

自分のために、たった一体で戦っている〈ライガーゼロ〉に想いを馳せて、カグヤは心でつぶやいた。

（……ありがとう）

後方に消えゆく戦場を後にして、カグヤとフィーアは一路、〈バースト・ポイント〉へと針路を取った。

向かうは東方大陸の最東端。〈大戦〉により荒野と化し、〈エイミス教団〉により封鎖区画に指定された土地だった。

世界の果て。

終りを迎えるには相応しい場所だろう。

だが、そこには――

●
●
●

「――〈守護者〉？」

アサト・タチバナはその単語を繰り返した。

「そうです。〈バースト・ポイント〉には自動防衛システムがあります。それはこの惑星Ｚｉの意思とも呼べる存在です」

そう応えたマヘリア・メリルの表情にはいつもの余裕が無かった。

相当、切羽詰まっているのだろう。〈ＺＯＩＴＥＣ〉社内で起きた騒動と、それによる混乱のおおまかな内容を告げると、間を置かずに本題を切り出して来た。

「つまり、その〈守護者〉が居るから大丈夫――ということですか？」

アサトの横に座っていたハルカ・クスノセは、場にそぐわぬどこかのんびりとした口調で言った。

「〈教団〉の上層部はそう考えています。いくら〈シラヒメ〉が強力なゾイドであっても〈守護者〉を倒す事は不可能だと」

『姉』を気遣ってか、マヘリアの隣に座っていた『妹』のミゼット・レミントンが応えた。

「だがマヘリア、あんたはそう思えない」

「そうです。実際に対峙したアサトさんならお判りでしょう？〈シラヒメ〉のあの力は〈ヤ

ミヒメ〉と同等のものです。あるいは〈守護者（ガーディアン）〉すら倒してしまうかもしれません。そうなれば……」

――世界の終り。

そんな言葉がアサトの脳裏をかすめた。

だが本当にそれだけだろうか？

マヘリアの態度からは、それ以外に対する不安がある様にアサトは感じた。

「――いいですか？」

沈黙を破ったのは意外にもカスミ・シノザキだった。普段から黙して語らずの彼女が、こういう場で自分から発言するのは珍しい。

「どうぞ」

マヘリアに促（うなが）され、カスミは問うた。

「その〈バースト・ポイント〉を護っている自動防衛システム――〈守護者（ガーディアン）〉というのは、何なんですか？」

「ゾイドよ。私も実物を見たことはないけど、最強最悪のね」とミゼットは前置きして、続く言葉をマヘリアに譲（ゆず）った。

「この惑星Ｚｉ（ズィー）の意思を代行するもの。〈世界の理（ことわり）を顕（あらわ）すもの〉……〈破滅の魔獣〉――」

その名は――

「――〈デスザウラー〉です」

第二十二話

言葉だけでは届かない。
想いだけでは伝わらない。
たとえ百万言を費(つい)やそうと、億の祈りを捧げようと、閉ざされた心には響かない。

どうすれば届く？
どうすれば伝わる？
どうすれば、あんたの心に響く？

ほんの少しのきっかけでヒトは変われる。
世界すら変えていける。
今の自分が絶対ではない。
過ちを繰り返す事でヒトは前に進める。
罪を背負い、贖(あがな)う事でヒトは生きていける。
許されない罪など無い。
あるとすれば、それは――

第二十二話　世界の果てで（前編）

〈バースト・ポイント〉に向かう巨大航空母艦ゾイド〈ホエールキング〉の格納庫。そこに〈ヤミヒメ〉は居た。装備は〈カグヅチ〉と二五〇ミリ・ライフルの基本仕様に加え、口には試作型ツイン・レーザー・ブレード〈クロヤシャ〉をくわえている。

コクピットに座るアサト・タチバナはじっと目を閉じていた。思い返すのは事務所を出発する前のやり取りだ。

『――どうして行くんですか？』

カグヤ・イザヨイを止めて欲しいというマヘリア・メリルの依頼を承諾（しょうだく）したアサトに対し、カスミ・シノザキは言った。その口調はいつもどおりの静かなものだったが、その表情は不安と疑念に曇（くも）っていた。それは彼女をよく知る人間でなければ気付かない様な小さな変化だったが。

『記録が確かなら、〈デスザウラー〉のスペックは圧倒的です。もし『オリジナル』であるなら戦略兵器と言っても過言ではありません。たとえ〈シラヒメ〉であっても、倒す事なんて不可能です』

『かもしれん』

カスミの意見にアサトは短く同意した。

『ならどうして行くんですか？〈守護者（ガーディアン）〉に任せておけばいいじゃないですか。下手に介入すれば巻き添えになるだけです』

それなのに何故（なぜ）？　カスミの灰色がかった黒い瞳はそう問いかけている。

『正直――俺にもよく判らん』

『……』

『そう怖い顔をするな。美人が台無しだ』

『茶化さないでください』

カスミの視線は変わらずにアサトを真っ向から見据（みす）えている。

（少しは変わったか）

アサトは心中で灰色（アッシュブロンド）がかった銀髪の少女の変化を感じた。自分の感情を表現するのが苦手で、いつしか何事にも無関心になっていたカスミが、こうして感情をぶつけてくる事は

なかった。その変化が嬉しかったのかもしれない。

だから――

『別に、死にに行くわけじゃない』

微笑を浮かべてアサトはそう言った。

『――――！』

対するカスミは意表を突かれた様に視線をアサトから逸らした。その白い頬にやや朱が差していたのを隠す様に。

『……卑怯です。そんな顔されたら、何も言えなくなるじゃないですか』

カスミは俯いた。長い前髪に隠れてその表情が見えなくなる。

『――大丈夫ですよ』

新たな声はカスミの背後から聞こえた。

長い黒髪の娘だ。その表情は穏やかに笑んだまま、カスミの両肩に手を乗せた。

『アサトはちゃんと帰ってきてくれます。これまでもそうだったでしょう？』

ハルカ・クスノセ。アサトとカスミの上司たる彼女は『ね？』と念を押す様に言った。

『相変わらず楽観的だな』

『悲観的になるよりはずっといいと思いますよ』

アサトの皮肉をなんでもない事の様にハルカは切り返した。

『そうだな。そうかもしれん』

『ええ、きっと』

アサトは苦笑。

対するハルカはやはり穏やかに笑みを浮かべ続ける。すると何事かカスミの耳元で囁いた。

はっとしてカスミが顔を上げる。

そして――

『あの……いってらっしゃい』

『……』

一瞬、カスミの言葉が異国の言語の様にアサトは感じた。

『いってらっしゃい』――それは送り出す言葉だ。別れの言葉ではなく、再会を意味する言葉。

ならば返す言葉は決まっている。

『ああ。いってくる』

『いってらっしゃい』

こちらは無論、ハルカだ。
だが彼女はそれだけでは終わらない。一瞬でアサトとの距離を詰めると、その右頬に軽く口づけをした。
『……お前な』
『これくらいはいいでしょう？　帰ってきたら続きをしましょう』
『聞いた事のある台詞だ』
『そうですか？』
アサトはもう一度苦笑を浮かべて言った。
『じゃあ、いってくる』
『はい。お早いお帰りを』

回想を終えて右の頬に手を当てる。まだハルカの唇の感触がある様な気がする。
カスミの視線が痛かった気もするが、それは考えない事にした。
『――マスター』
女声を思わせるクノキの無機質な機械音声がアサトの耳朶を打つ。
「何だ？」
『貴方には生きて帰る理由がある』
「ああ。そうだな」
『私にもあります』
「……そうか」
『はい。だから――』
だから――
『ご自愛ください――マスター』
「判ってるよ――クノキ」
やがてマヘリアからの通信が入る。目標降下予定地点だ。

●
●
●

見渡す限りの荒野にそれは現れた。
いや――居た。
地を割ってでもなく、雷雲を伴ってでもなく、気付けばただ悠然とそこに存在していた。

当たり前の様に、それが真理であるかの様に。

巨大な――それはとてつもなく巨大な鋼鉄のケモノだった。

全高は二百メートルを超えているだろう。直立した姿勢に長い尾というシルエットは、特撮映画に登場する怪獣と呼ぶに相応しい。

全身は滑らかな曲面を描く装甲に包まれており、腕には巨大な爪。頭部にはいくつも機銃を備えているのが見て取れる。

黒を基調とした規格外の戦闘機械獣（きかいじゅう）。

かつて古代文明を滅ぼしたと言われる〈破滅の魔獣〉。

〈デスザウラー〉と呼ばれるモノ。

初めて見るはずなのに、初めてではない気がする。

それが〈シラヒメ〉のコクピットに座るカグヤ・イザヨイの、〈デスザウラー〉に対する第一印象だった。

その圧倒的な存在に対する恐れ――それは惑星Ｚｉに生きる全ての生命が持つ、根源的な恐怖だ。

そして次に感じたのは――恐れ。

〈デスザウラー〉――それは〈破滅の魔獣〉。

〈世界の理（ことわり）を顕（あらわ）すもの〉。

〈惑星Ｚｉ（ズー）の意思を代行するもの〉。

〈守護者（ガーディアン）〉。

――グゥルルルルルルル……グギュルゥウゥオオオンッ‼

金属質な響きを含んだ、恐怖を喚起させる咆哮を〈デスザウラー〉が上げた。

思わずその場に平伏（ひれふ）したくなる衝動に耐え、カグヤは〈デスザウラー〉の巨体を見上げ続けた。

見る者に恐怖を抱かせる凶暴な容貌（ようぼう）と目が合う。

（……見られている？）

〈デスザウラー〉の視線をカグヤはそう感じた。

（……あなた、だれ？）

言葉が通じるとは思えない。

（……あなた、だれ？）

それでもカグヤは問いかけずにはいられなかった。

（……あなたは――）

●　●　●

ゼネバス帝国によって開発された〈デスザウラー〉には逸話がある。

それによれば〈中央大陸戦争〉で実戦投入された〈デスザウラー〉は、かつて古代文明を滅ぼしたと言われるオリジナルの劣化コピーに過ぎないという。我々が知る全高約二十メートルの大型恐竜型ゾイド〈デスザウラー〉がそれだ。

では、かつて古代文明を滅ぼしたとされるオリジナルの〈デスザウラー〉とは何か？　これにはいくつかの記録がある。ひとつがガイロス帝国皇帝ルドルフ・ゲアハルト・ツェッペリンⅢ世の摂政であったギュンター・プロイツェンが復活させ、首都ガイガロスを炎上させたというもの。

もうひとつが古代遺跡〈イヴポリス〉にて封印されていたとされるものだ。

どちらもいくつかの文献によって記されているのみで、公的な記録ではない。だが、オリジナルの〈デスザウラー〉が巨大で、圧倒的な猛威を振るったという事だけは共通している。

それこそ一夜にしてひとつの文明を滅ぼすほどの強大な存在だったと。

●　●　●

気付いた時には周囲はひたすら黒い空間で満たされていた。暗いのではない。その証拠に自分の姿ははっきりと視認出来る。

カグヤはこの空間を知っている。〈シラヒメ〉の仮想人格と出逢った時に来た事がある。

「……仮想空間？」

カグヤがぽつりとつぶやくと、それに応える声があった。

「その通りだ。ようこそ、私の世界へ――〈福音の女神〉よ」

声はカグヤのすぐ近くから聞こえた。いつからそこに居たのか、距離にして二メートルと離れていない位置に、男の姿があった。

年齢はよく判らないが、およそ三十代くらいだろう。筋肉質とまではいかないまでも、がっしりとした身体つきをしている。灰色がかった白髪は女性の様に長く、男の不敵な表情に似合っていた。

「……あなた、だれ？」
「判っているのだろう？　我が名は〈デスザウラー〉――絶対無比の力を誇る、この惑星Ｚｉでもっとも優れた生命体だ」
よく通る特徴的な声だとカグヤは感じた。高圧的で、他者を見下す傲慢さが透けて見えるとも。
「……違う。あなた、人間でしょう？」
カグヤの言葉に男は笑みを消した。
「……そうだった時もあったな。だが今となってはどうでもいい事だ。〈福音の女神〉よ」
「……そんな名前で呼ばないで。あたしは〈女神〉なんかじゃない」
「自覚が無い様だな。君はゾイドに福音をもたらす、類稀な存在だという事に」
「……関係無い。あたしはただ壊すだけ」
「無駄な事はやめておきたまえ。君に勝つ可能性など、毛筋ほども無い」
「……やってみなければ判らないわ」
「ふん。まあいい」
そう言って男は不敵な笑みを取り戻してカグヤに視線を向け直した。
「何故そうまでして戦う？」
「……愚問ね。ゾイド乗りに戦う意味を問うの？」
「確かに。では壊すことに何の意味があるというのだ？」
「……意味なんて必要無い。ただそうしたいだけよ」
「なるほど……ふふふ、はっはっはっはっは――！」
男は笑った。口の端を歪め、さもおかしそうに。
「愚かな！　目的の無い破壊など、それこそ何の意味も無いというのに！」
「……言ったでしょう。意味なんて必要無い」
「そうか、そうだったな。ふ――ふはははははっ！」
何がそんなに楽しいのだろうか。カグヤが疑問に思った瞬間、目の前がわずかに霞んだ。
「……？」
おかしい。意識が遠くなっていく気がする。
「頃合いだな」
「……何をしたの？」
ふらつく頭を押さえて、カグヤは倒れそうな身体を支える。
男は自分の腰に手を当て、不敵にカグヤを見つめている。
「光栄に思いたまえ。君は我が身体の一部となる。その類稀な性質、私の力としてやろう」

「……」

言葉が出ない。身体から力が抜けていくのを感じる。

「辛いのだろう？　生きるのが苦しいのだろう？　そんな思いをしてまで現実にすがる必要はない」

男の声が心地良く聞こえる。

「私とひとつになれ――君の願いは私が叶えてやろう」

「……あたしの、願い――？」

「壊すのだろう？　この世界を。これで私も〈守護者〉などという軛から解放される」

「……壊す……この世界を……」

「もう何も考える必要は無い。このまま闇に沈め」

薄れゆく意識の中で、男の高笑いだけがはっきりと聞こえた。

●　●　●

〈デスザウラー〉が再び金属質な響きを含んだ咆哮を上げた。すると両腕を大きく広げ、胸部の装甲板がドアの様に左右に開いた。その奥にフィーアが見たものは、〈デスザウラー〉の巨体に見合う、巨大なゾイドコアだった。

ぼんやりと青く輝く球体状のそれは、全てのゾイドが核として持つ、最重要器官だ。

「ゾイドコアをむき出しにした？　もしかして……？」

ふと嫌な予感がフィーアの脳裏を過ぎる。

〈デスザウラー〉が巨大な機体をこちらへと近づけてくる。

「やばいよカグヤ――あいつは〈シラヒメ〉を取り込むつもりだよ！」

フィーアが慌ててメイン・シートに座るカグヤへ報告する。だが、カグヤは操縦桿を握るどころか返事もしない。

「カグヤ……？　カグヤ!?」

カグヤの様子がおかしい。フィーアはサブ・シートを離れ、カグヤの状態を確認するため身を乗り出した。そこには放心状態のパートナーの姿があった。

「カグヤ！　カグヤってば!?」

必死に呼びかけるが、カグヤの瞳はフィーアを見ていない。ぼんやりとどこか遠くを見つめている。

「……〈デスザウラー〉に呼ばれてるの？　ダメだよ、カグヤ――カグヤ！」

必死にカグヤを目覚めさせようと呼びかける。だが、カグヤは応えない。

そうしている間にも〈デスザウラー〉が手の届く位置まで近づく。そして〈シラヒメ〉を鷲掴(わしづか)みにしようと、巨大な爪を備えた腕をこちらに向けて降ろしてくる。

「〈シラヒメ〉！　動いて‼」

最後の手段とばかりにフィーアは直接〈シラヒメ〉を動かそうとする。だが〈シラヒメ〉は動かない。

「……ダメなんだね、もう」

今の〈シラヒメ〉はカグヤの命令しか受け付けない。そうなってしまったのだとフィーアは悟った。

「……」

急にすべてがどうでもよくなってきた。このままカグヤと一緒に〈デスザウラー〉に取り込まれるのもいいかもしれない……そう思うしかなかった。

そこで、ふとある青年の事が頭を過ぎった。

「そういえば、連絡……しなかったな」

アサトから受け取った事務所の名刺(めいし)をじっと見る。

「さよなら、アサト――」

そこへ――

――轟音。

そして――

『――〈シラヒメ〉、応答しろ。カグヤ・イザヨイ。フィーア。返事をしろ！』

「……アサト？」

通信機越しにフィーアの耳に届いたのは、幻聴ではないアサトの声だった。

●　●　●

〈デスザウラー〉の荷電粒子砲を警戒して、距離を置いて着陸した〈ホエールキング〉から下艦して、荒野を駆けること数分――〈ヤミヒメ〉のコクピットからアサトが見たのは異様な光景だった。〈デスザウラー〉の常識を逸(いっ)した巨大さもそうだが、それが胸部の装甲板を開き、するどい爪で〈シラヒメ〉を鷲掴(わしづか)みにしようとしている。

「――くッ！」

アサトは咄嗟(とっさ)にライフルのトリガーを引いた。狙うのは〈デスザウラー〉のむき出しの

コアだ。フルオートで撃ち出された二五〇ミリ弾が殺到する。

着弾の轟音と爆煙で〈デスザウラー〉の上半身が見えなくなる。

（やったか……いや、違う――！）

嫌な悪寒を感じたと同時に、アサトは操縦桿を右に倒した。〈ヤミヒメ〉の黒い機体が命令通りに右に跳ぶ。それと同時に一瞬前まで〈ヤミヒメ〉が居た位置にビームの雨が降り注いでいた。

回避行動を取りつつ視線は〈デスザウラー〉から外さない。やがて爆煙が晴れ、〈デスザウラー〉の健在な上半身が現れる。左腕を盾にして、二五〇ミリ弾のゾイドコアへの直撃を防いだのだとアサトは理解する。

「意外と俊敏だな……」

〈デスザウラー〉の全高は優に二百メートルを超えている。それであの動きが出来る事にアサトは戦慄した。

それだけではない。〈デスザウラー〉の巨体を視認した時から、言い様のない恐怖を感じる。

死への恐怖。

絶対的な存在に対する恐れ。

それらを必死に押し殺しながら呼びかける。

「〈シラヒメ〉、応答しろ。カグヤ・イザヨイ。フィーア。返事をしろ！」

そうしている間にも、動きを見せない〈シラヒメ〉が〈デスザウラー〉の爪に捕らわれ、徐々に持ち上げられていく。

『――アサト!?』

通信機から少女の悲鳴にも近い声が聞こえた。

紅い髪と瞳の少女の姿がアサトのイメージに浮かんだ。

「フィーアか、どうした！　取り込まれるぞ！」

『ダメなの！　カグヤが……カグヤが――』

そこで、ぷつりと通信が途絶えた。

「どうした、応答しろ！　フィーア！」

見れば、すでに〈シラヒメ〉の機体が半分以上〈デスザウラー〉の体内に取り込まれている。そしてその全容が見えなくなると、開いていた胸部の装甲板が閉じた。

『――アサトさん、状況はどうなっていますの？　今のはもしかして……』

通信機から別の女性の声がした。マヘリアだ。

レーダーに新しい機影が映っていたのは気付いていた。ようやく追いついてきたのだろ

う。そこには右腕に巨大な杭打ち機（パイルバンカー）を備えたゴドス・タイプ——通称〈ビアトリス〉が居た。対デスザウラー用に準備したのだろう、左腕には巨大な対物（アンチ・マテリアル）ライフルを装備している。

「見ての通りだ。〈デスザウラー〉に取り込まれた……」

『そんな……カグヤさん！』

マヘリアの悲痛な叫びが虚（むな）しく響く。

だが、そんな事はお構いなしに〈デスザウラー〉が咆哮を上げた。

——グギュルゥウゥオオオンッ‼

それは歓喜の叫びだったのだろう。より強い力を自らのものとし、絶対的な力を誇示するための。

声を上げると〈デスザウラー〉が前進を始めた。新たな獲物を探す様に、悠然とした足取りで。〈ヤミヒメ〉や〈ビアトリス〉の存在など見えていないかのように。

「奴は〈バースト・ポイント〉を出るぞ……」

『——そんな、あれは〈守護者（ガーディアン）〉よ。ここから出られるはずが無いでしょ⁉』

〈ビアトリス〉の副操縦士（サブ・パイロット）であるミゼット・レミントンが声を上げた。

『……あり得ない事じゃありませんわ。カグヤさんを取り込んだ事で、〈守護者（ガーディアン）〉に何らかの影響を与えたとするなら』

マヘリアが言った。

『壊す事』——それがカグヤの行動原理だ。

だとすれば——

「冗談じゃない。あんなのが人口密集地に——いや、ここから出るだけでも問題だ」

あんなものが人里に出ればそれだけで恐慌（パニック）が起こる。いや、そんなものでは済まないだろう。ミヤコノ・シティを蹂躙（じゅうりん）する〈デスザウラー〉の姿を想像するだけで寒気がする。

「あれを止めるぞ。あんなものを野放しにしたらとんでもない事になる」

『どうする気ですの？』

「援護しろ、考えがある」

『考えって……あんな化け物を私達だけでどうしようって言うのよ⁉』

「どうにかするしかない。俺達意外に誰がやる？　〈教団〉が何とかしてくれるのか？」

『それは……』

ミゼットが言い淀(よど)む。〈エイミス教団〉が総力を挙げても無駄だろう事は容易に想像がつく。オリジナルの〈デスザウラー〉は規格外なのだ。それこそ次元が違う。

『〈ドラグーン〉の力を使うつもりですわね？』

マヘリアが窺(うかが)うように訊(たず)ねる。

「その前にカグヤ・イザヨイとフィーアを引きはがす」

『――え？』

マヘリアとミゼットの声が重なった。

「少しでいい。時間を稼いでくれ。クノキ、モード２！　ユー・ハブ・コントロール！」

『了解。アイ・ハブ・コントロール。――マスター、御武運を』

「あいよ」

クノキの言葉にアサトは軽く応えた。

するとアサトの身体(からだ)が拘束衣に縛り付けられた囚人の様にシートに固定される。

『ちょっと！　どういうつもりよ、ボンクラ⁉』

状況が理解出来(でき)ないミゼットは、ただただ困惑した。

第二十三話

いつ間違えたのだろう？
どこで間違えたのだろう？
何故（なぜ）――間違えたのだろう？

あたしの世界は歪（ゆが）んでいて。
希望なんてどこにも無くて。
生きるのが嫌になって。
全部がどうでもよくなっていた。

だけど、それでも生きてきた。
死んだ様に。
いっそ死んでしまいたいと思いながら。
あたしなりに。
それなりに。

もっと前向きに生きていたら、何か変わっていただろうか？
もっと必死に生きていたら、何か変えられただろうか？
もしそうなら、やり直したい。
次は間違えない様に。

もう二度と――大事なものを失（な）くさない様に。

第二十三話　世界の果てで（後編）

暖かな日差しが降り注ぐ小高い丘。そこには家族であろう三人連れがレジャー・シートを広げて座って居た。ピクニックにでも来て、昼食を摂(と)っているのだろう。にぎやかに談笑しながら食事をしている光景がそこにはあった。

両親と思われる二人の男女と、少女が一人。

少女はまだ十歳くらいだろう。母親譲(ゆず)りの綺麗な黒い髪と瞳の可愛らしい少女だ。

よほどお腹が空いていたのか、料理を喉(のど)に詰まらせ、母親に飲み物を催促している。父親はそれを微笑ましげに眺(なが)め、母親も慈愛に満ちた笑みを娘に送っている。

それは恐らく、どこにでもある当たり前の家族の姿。

『ねえ、お父さんはどうしてお母さんと結婚したの？』

子供ならではの唐突な質問。それに対し父親は少し照れながら『お母さんが好きだからだよ』と答えた。

『へえ。お母さんは？』

当然の様に母親にも同じ問いをする少女。

『お父さんにプロポーズされて、ＯＫ(オーケー)したからよ』

母親は穏やかな笑みを浮かべながら、そう答えた。

『ぷろぽーずってなに？』

『ずっと一緒にいてくださいってお願いすることよ』

さらりと言う母親とは対照的に、父親は顔を赤くしてそっぽを向いている。

『ねえ。お父さん、なんて言ったの？』

『あのね――』

少女の耳元で囁(ささや)く様に母親はプロポーズの言葉を告げた。

父親は状況に耐えきれなくなったのか、聞こえていない振りをすることに決めたらしい。

『しあわせにします？』

『ええ。その言葉を信じてお母さんはお父さんと結婚したの』

少女が聞いたままの言葉を口にすると、母親は父親に向かって『そうでしょう？』と声をかけた。

『……はい。そう言いました』

観念した父親は顔を赤らめたまま肯定(こうてい)した。

その言葉を聞いた少女は『ねえ、お母さんはしあわせになれたの？』と母親に訊(き)いた。

『ええ。とっても幸せよ。それに今はあなたが居るから』

少女は父親にも同じ質問をした。父親も笑みを浮かべて言った。

『幸せだよ――カグヤ』

「――――！」

その言葉が合図だったかのように、家族の光景がテレビの向こう側の出来事の様に、カグヤ・イザヨイの意識は知覚した。

「……これはあたしの記憶？」

そうだ。あの少女は幼いころの自分だ。幸せというものを意識していなかった、幼き日の情景だ。

「……どうして今更、こんなものを――」

目の前の映像には屈託(くったく)なく笑っている少女の姿が映っている。

判らない。自分はあの頃に帰りたいと望んでいるのだろうか？

「……どう思う？　アサト・タチバナ」

カグヤが振り返ると、そこには一人の青年が立っていた。黒い髪と瞳の、どこか物憂(ものう)げな表情の青年だ。

「のぞき見するつもりはなかったんだがな」

アサト・タチバナはそう言ってカグヤの過去の映像に視線を戻す。そこには変わらず笑顔を振りまいている少女の姿が映っている。

「あれが昔のあんたか？　可愛いじゃないか」

「……ロリコン？」

「子供は苦手だ。どう相手をしていいか判らん」

「……そう」

カグヤの疑惑を、アサトは苦笑して弁解した。

●　●　●

黒い装甲の隙間(すきま)から紅(あか)い光を漏(も)らしながら、漆黒の〈コマンドウルフ〉が駆ける――〈ヤミヒメ〉だ。その動きは野性的で、紅い光の尾を引く姿が幻想的ですらある。

〈デスザウラー〉の放つビームの機銃掃射をかわしながら、牽制するようにライフルを三点射（スリー・バースト）。決して深追いはせず、足止めに徹する。

「……あれ、例の〈オーガノイド〉がやっているんですか、お姉さま？」

〈ヤミヒメ〉の常軌（じょうき）を逸（いっ）した――ヒトの操縦ではあり得ない――動きを見て、サブ・シートのミゼット・レミントンは姉に問うた。

「そう。今頃アサトさんの意識は〈デスザウラー〉の中に潜（もぐ）っているはずよ」

メイン・シートに座るマヘリア・メリルは愛機の操縦桿（そうじゅうかん）を握ったまま応えた。

「……」

やはり状況に混乱しているのだろう。ミゼットの表情は釈然としない。

「ミゼット、ぼんやりしてる暇（いとま）はなくてよ。今はアサトさんの援護をしなくては」

「……判りました。〈パニッシャー〉、起動準備出来（でき）てます。激発音声（トリガー・ヴォイス）を」

「それでこそわたくしの妹ですわ。〈穿（うが）て聖痕〉――」

マヘリアとミゼットが搭乗する強化型〈ゴドス〉――愛称は〈ビアトリス〉。

その左腕に装備された長砲身対物砲（ロング・バレル アンチ・マテリアル・ライフル）〈パニッシャー〉の安全装置（セーフティ）が解除される。

「さてその命、神に返して頂きましょうか」

「……援護するんじゃなかったんですか？」

「お約束ですわ」

「もうツッコミみませんからね」

やれやれといった口調のミゼットだが、姉がいつもの調子を取り戻してくれたのが嬉しかった。

だから――

「〈パニッシャー〉に問題無し。いけます、お姉さま！」

「了解ですわ。いきますわよ〈ビアトリス〉！」

――グォオオオオオオオオッ！

〈ビアトリス〉は短く咆哮を上げ、右脚を踏ん張り、左腕の〈パニッシャー〉を目標目がけて突き出した。長い砲身は槍（やり）の様にも見える。

やがて第一射が撃ち出される。大口径の対物弾が空気を切り裂いて〈デスザウラー〉の頭部に迫る――直撃。

だが、ダメージを受けた様子はない。

〈デスザウラー〉が気付いた様にこちらを向いた。
「無傷……ですね」
「最初からあてにはしていませんわ。今はとにかく牽制（けんせい）を」
「はい。あのボンクラに貸しを作ってやりましょう」
「そういうことですわ」
そう言いながらマヘリアは〈ビアトリス〉を移動させる。
〈デスザウラー〉が尾部から放ったミサイル郡がそれを追尾し、〈ビアトリス〉の直上で破裂した。
「多弾頭ミサイル⁉」
ミゼットの言葉を証明するかの様に、破裂した弾頭から細長い針（ニードル）が雨の様に降り注いでくる。
すでに回避行動に入っていた〈ビアトリス〉は辛（から）くも串刺しを逃れ、回避に成功する。そして〈デスザウラー〉の正面をさけて位置取りを行う。荷電粒子砲対策だ。
〈パニッシャー〉の第二射を放つ――これも〈デスザウラー〉の頭部に直撃した。だが、それでも標的の動きは止まらない。
続けて〈ヤミヒメ〉が右側面から仕掛ける。ライフルをフルオートに切り替えて〈デスザウラー〉に対して弾幕を張る。
だが、〈デスザウラー〉は止まらない。〈ヤミヒメ〉と〈ビアトリス〉――二機の機獣を相手にしながら、まるで歯が立たない。
「……圧倒的すぎです」
「そうね。けど、やるしかありませんわ」
三度愛機を構えさせる。残弾はそう多くないが。
「いざとなったら、体当たりしてでも止めましょう」
「そんなの無茶苦茶です！」
しかし不思議と、初めて〈デスザウラー〉を目（ま）の当たりにした時ほどの恐怖はもう感じていない。マヘリアはアサトを信じているのだろうと思う。そして、ミゼット自身も。

●　●　●

『お母さん……？』
物言わぬ死体となった母親の姿を見て、幼いカグヤ・イザヨイは言葉を無くした。思考が現実に追いつかないのだろう。口を開閉させるばかりで声が出てこない。

やがて場面（シーン）は葬式の会場に移った。喪服を着た大勢の人間が沈鬱（ちんうつ）とした表情で死者を悼（いた）んでいる。幼いカグヤも黒い喪服を着て血縁者席に座っている。

「……お母さんはあたしが十歳の時に死んだ。通り魔の犯行で、犯人は捕まらなかった」

映像を見ている今のカグヤがぽつりとつぶやいた。

「……そうか」

同じ映像を観ているアサト・タチバナはただそう応えた。

また場面が切り替わる。映し出されたのは着崩れた喪服の男が、幼いカグヤを暴行している光景だった。

『カグヤ……カグヤ……っ！』

『痛いよ、お父さん……もう、やめて……！』

乱暴に腰を振りつつ付ける男の目は正気を失っていた。あるのは実の娘を犯している罪悪感と背徳感だけだ。

『……はあ、あん、う……ああん！』

やがてカグヤの悲鳴も嬌声（きょうせい）を含んだ艶（つや）のある声に変わっていく。

『お、父さん……お父さん……！』

幼いカグヤは泣いていた。泣きながら、必死で自分を繋ぎ止めようとしていた。

「……これがあたし。実の父親に犯されて悦（よろこ）んでる汚らわしい女。それがあたしなの」

自嘲（じちょう）する様に今のカグヤが暗い笑みを浮かべる。

対するアサトは何も言わない。言うべき言葉が見つからなかった。

「……お父さんも、お母さんの後を追う様に死んだ。お母さんが居ない世界に、お父さんは耐えられなかった。だから自殺した」

それは恐らく、娘を傷付けた事に対する罪悪感もあったのだろうとアサトは思ったが、そんなことは何の慰（なぐさ）めにもならないと、言葉にはしなかった。

「……あたしにはもう何もない。何を信じていいか判らない」

「……」

「……壊すのにも疲れたわ。〈デスザウラー〉を止めたいのなら、好きにすればいい」

「……」

やがて場が沈黙する。

何も言わないアサトに、カグヤは少し苛立（いらだ）つ。

「……あなた、何をしに来たの？　世界を救いにでも来たつもり？」

カグヤの言葉に、アサトは無感情な口調で応える。

「あいにくと俺は正義の味方でも何でもない。この世界がどうなろうと知ったこっちゃな

い――そう思ってたよ」

今度はカグヤが黙ってアサトの言葉を聞いた。

「ついでに言えば、あんたがどうなろうと、何をしようと知ったこっちゃない。生きるのがそんなに辛いなら――勝手に死ねばいい」

「……そうね。あたしもそう思う」

「なら何故そうしない？」

「……」

「怖いからだ。俺もあんたと同じだよ。この世界が吐き気がするくらい嫌いだった。いつ死んでもいいと思ってた。生きる事に意味なんて無いと思い込んでた」

そこで考える用に間を空けた。

「けど、そうじゃない事に気付いたよ。気が付いてみればなんてことはない。前にも言ったな、大事なものは気が付けば近くにあるもんだ」

そう言われてカグヤは紅い髪と瞳の少女を幻視した。自分を好きだと言ってくれた、自分に微笑みかけてくれた少女を。

「あんた、前に言ったな。俺とあんたは同じだ――って」

カグヤは無言で続きを促す。

「確かに同じだ。あんたを見てると、まるで鏡を見せられている様な気分になる」

「……そう」

「ああ、気が滅入ってくるよ――最悪だ」

と、物憂げな青年は嘆息した。

「けど、おかげで気付けたよ。俺なりの生きる理由にな」

「……」

「あんたにもあるんじゃないのか？　生きるなりの理由って奴が」

生きる理由。

生きていられる訳。

それは――

「……フィーア――」

カグヤがぽつりとつぶやいたのはパートナーの名前だった。

「……あたしは、もう一度フィーアに会いたい」

「ならここから出ろ。あとはあんた次第だ」

そう言うとアサトの身体が雑音の様な音と共に消えた。

「……」

だがカグヤは動じない。ここは通常空間ではないのだから何が起こっても不思議はない。今は他にやるべき事がある。

「……フィーア」

名前を呼んだ。

虚空(こくう)に両腕を伸ばす――誰かを抱きしめる様に。

「……居るんでしょう？　来て――フィーア」

「――カグヤ！」

虚空から幻のように現れた少女を強く抱きしめる。

「遅いよ、カグヤ。もうダメかと思ったんだから！」

「……ごめんなさい」

「いいよ。もういいから」

フィーアは泣き笑いの顔のまま、カグヤの腰に回した腕に力を込める。

「まだこれからやらなきゃいけないことが、いっぱいあるんだからね」

「……そうだね。行こうか、フィーア」

「うん……うん！」

そしてもうひとりの声が重なる。

「――ようやくお目覚めかな？　愛しの我が主(マイ・ロード)よ」

現れたのは白髪橙瞳の中性的な人物だ。カグヤのゴシックロリータにも通じるパンク・ファッションに身を包み、穏やかな笑みを浮かべている。

「まったく、待ちくたびれたよ。けど美人に待たされるのも男の甲斐性(かいしょう)かな？」

美貌の青年。彼はシラヒメ――正確には〈シラヒメ〉の対人インターフェイスがヒトの姿を採(と)ったものだ。ゾイドに性別はないが、彼は男性格に当たる人格を有していた。

「……無駄口はいいわ。いけるの？」

「君がそう望んでくれるなら」

カグヤに邪険にされても、シラヒメは機嫌を損ねた様子はない。『怒る』といった感情すら無いのではないかと思わせる。

「……なら手伝って。ここから出る」

「〈リントヴルム〉の力を使う。いいね、フィーア？」

「はいはい。判ったからカグヤから離れて」

フィーアがカグヤとシラヒメの間に割って入る。

「おやおや、つれないね。久々の再会を邪魔するなんて無粋(ぶすい)だよ？」

「うるさい！　さっさと準備しなさいよ！」

「……」

その光景をカグヤは懐かしく思う。

何故だろう？　何故こんなにも落ち着くのだろう？

（……これが大事なもの？）

よく判らない。

だが、今やるべきことは判っている。

「……いくよ――フィーア、シラヒメ」

「うん、カグヤ！」

「イエス、マイ・ロード」

●
●
●

「――はあああッ！」

裂帛の気合と共に〈ビアトリス〉の右腕の杭打ち器〈セイクリッド・ランサー〉が〈デスザウラー〉の右足を狙う。が、装甲の表面を傷付けるのみでダメージを与えられない。

最後の空薬莢が排出され、〈セイクリッド・ランサー〉も使用が不可能になった。左腕に装備されていた〈パニッシャー〉はとっくに弾切れ、まさに〈ビアトリス〉は『刀折れ矢尽きた』状態だ。

〈セイクリッド・ランサー〉を強制排除し、〈デスザウラー〉から距離を取ろうとするが、無茶とも言える接近戦をしたため、〈デスザウラー〉の尾――加重力衝撃テイルに弾き飛ばされた。

〈ビアトリス〉が数メートルも飛ばされ、背中から地面に激突する。

「っく……ミゼット、ダメージ・コントロールを！」

「やってます！　けど、もう――」

表示枠に表示されている〈ビアトリス〉の簡略図が所々、赤で染まっている。被害は甚大だ。いかに強化された〈ビアトリス〉であっても、〈デスザウラー〉の巨体から繰り出される一撃には耐えられるはずもない。

だがそれでも――

「立ちなさい〈ビアトリス〉！　まだよ、まだやれるでしょう!?」

叫ぶようにマヘリアは愛機を鼓舞する。そこには気品も余裕もない。あるのは必至さだけだ。

「立って！　お願いだから……！」

「お姉さま……」

マヘリアの姿が痛々しくて、ミゼットは何も言えない。そんな自分が腹立たしい。

まだ何か出来る事があるはずだ。そう信じてミゼットは操作卓を操作する。出力は三割まで低下しているが、駆動系には問題はない。

ならば――

「〈ビアトリス〉、あなたはまだ動けるわ。もう少しだけがんばって！」

ゾイドは搭乗者の気持ちに応えるものだ。負けない気持ちがあれば、それはゾイドに伝わる。

「ミゼット……」

「やりましょう、お姉さま。体当たりしてでも止めるのでしょう？」

「そうね。そうでしたわ」

マヘリアが操縦桿を握り直す。

すると〈ビアトリス〉はゆっくりと機体を起こした。

そして短く咆哮を上げる。

『まだ戦える』――と宣言する様に。

その姿は〈デスザウラー〉からすれば、あまりにも非力に見えるだろう。いや、眼中にすら無いかもしれない。

そこへ――

『――〈ビアトリス〉、大丈夫か？』

〈ビアトリス〉のコクピットに通信が入る。〈ヤミヒメ〉のアサトからだ。

『すまん、待たせた』

「アサトさん？　どうなりましたの？　〈シラヒメ〉は？」

『すぐに出てくる』

そう言うとアサトからの通信は切れた。

マヘリアとミゼットが〈デスザウラー〉に視線を向ける。〈ビアトリス〉はだいぶ遠くまで弾かれていたのだと認識する。

〈デスザウラー〉は動きを止めていた。

煩悶する様に両腕を広げ、機体をのけ反らせる。

そして――紅い閃光が〈デスザウラー〉の胸部から吐き出された。

「――――!?」

マヘリアは驚愕した。ミゼットも同じだ。

〈デスザウラー〉の胸部の装甲が塵状になって消滅した。その奥から現れたのは六枚の羽

根を広げた〈シラヒメ〉の姿だった。
その光景は母親の腹を破って生まれてきた悪魔の姿を想起させた。

●　●　●

身体が軽い。肉体と言う枷から解き放たれた様に感じる。
意識もそうだ。どこまでも遠くに広がっていく感覚。
（……気持ちいい――これが〈ＬＤＳ〉の完全解放なの？）
カグヤは思考する。口を開く必要はない。思うだけでいい。
（そうだよ、カグヤ。これが〈リントヴルム・ドライブ・シンドローム〉の本領発揮）
フィーアの声が直接意識に届く。不思議な感覚だ。
（……まるでひとつになったみたいな感じがする）
（『みたい』じゃなくて、ひとつになったんだよ……だから、ずっと一緒だよ）
フィーアの言う通りなのだと判る。今の自分は〈シラヒメ〉そのものなのだ。
（……いくよ、〈シラヒメ〉――）
〈シラヒメ〉の機体を前進させる。そして――羽根を広げる。
鳥を思わせる六枚の巨大な羽根。
羽根を持った〈ジェノフューネラル〉。
その名は〈リントヴルム〉――〈シラヒメ　フォルム・リントヴルム〉。
イメージするのは鳥の羽ばたき。何ものにも縛られない自由の証。
マグネッサー・ウイングの羽根を羽ばたかせ、装甲の隙間から紅い燐光をきらめかせ、
〈デスザウラー〉から脱出する。
（……まずは借りを返す。〈デスザウラー〉を破壊する）
（了解だよ。けど残り時間に気をつけてね）
（……判ってるよ。フィーア）
純白の羽根を広げ、〈竜葬姫〉が空に舞った。

●　●　●

「あれが〈リントヴルム〉か……すさまじいな」
変容した〈シラヒメ〉の姿をアサトはそう評した。同種の力を持った〈ヤミヒメ〉に乗っているから判る。あれは本来、ヒトの争いに使っていい力ではない。

だがそうも言っていられない。チャンスだ。
「クノキ、こっちもやるぞ。〈DFC〉、リミット・ブレイク！」
『了解。〈ドラグーン・ファクター・コンプレックス〉最終段階（ファイナル・リミッター）、制限解除（セーフティ・リリース）』
アサトの要請にクノキは淡々と応じる。
そして、〈ヤミヒメ〉の黒い機体が紅（あか）い光に包まれ、一瞬でその形状を変化させた。本体は通常の〈コマンドウルフ〉のまま、その背部に刃（やいば）の様な鋭利な羽根を発生させた。
六枚の黒い巨大な羽根と、腰部から突き出た四枚の副翼を備えている。
その名は〈ドラグーン〉――〈ヤミヒメ　フォルム・ドラグーン〉。

――ウォオオオン…………るうおおッ！

オオカミ型特有の低い唸（うな）り声が、竜種の甲高（かんだか）いものに変質する。
（フォルム・ドラグーンへの移行完了。同調接続完了。形相干渉（けいそうかんしょう）システム問題無し）
クノキの声が直接意識（いしき）に届く。〈ヤミヒメ〉の手足が自分のそれの延長上にある様に感じる。

（一気に決めるぞ）
（制限時間に注意を。現状では一八〇秒間しか形状を維持出来（でき）ません）
言葉にせずとも瞬時に互いの思考が読める。思うだけで全てが事足りる特異な状態。
（くれぐれもご自愛ください――マスター）
（判ってるよ――クノキ）
こちらの準備が整うのを待っていたかの様に白い羽根を広げた〈シラヒメ〉が、〈デスザウラー〉に攻撃を開始した。白い機体から紅い光の尾を引きながら。
空中を滑（すべ）る様に移動しながら、不可思議な紅（あか）い閃光を纏（まと）わせた爪を〈デスザウラー〉に振るう。〈デスザウラー〉はむき出しのゾイドコアを守る様に身を反（そ）らし、右腕の爪で応戦した。
二つの爪がぶつかる。〈シラヒメ〉を鷲掴（わしづか）みにする様な〈デスザウラー〉の巨大な爪に対し、〈シラヒメ〉のそれは比べるまでもなく小さい――が、破壊されたのは〈デスザウラー〉の腕だった。形相干渉力場である紅い閃光を纏った〈シラヒメ〉の爪が、〈デスザウラー〉の下腕ごと爪を消滅させた。
更に〈シラヒメ〉は回し蹴りの要領で〈デスザウラー〉の右肩を蹴りつける。〈デスザウラー〉の巨体が揺らぐ。

だが〈シラヒメ〉の猛攻は終わらない。倒れる〈デスザウラー〉の左腕を爪で切り落とし、今度は頭を狙って尾を叩きつける。その様はサンドバッグをボコ殴りにするボクサーに近い。

しかし、〈デスザウラー〉も黙ってやられている訳ではない。巨大な口を大きく広げた。同時に背部の荷電粒子供給ファンが回転する。

（――まずい！）

アサトは咄嗟に〈ヤミヒメ〉を移動させる。

（〈防ぐもの〉！）

そして〈ヤミヒメ〉の前方に巨大な紅い防壁を展開させる。

〈デスザウラー〉が放った荷電粒子砲を受け止める。射線上にマヘリアとミゼットが乗る〈ビアトリス〉があったからだ。

大口径の砲門から発射される荷電粒子の奔流。しかし、それは〈ヤミヒメ〉の張った防壁を突破出来ずに終わった。

〈デスザウラー〉の背部に回り込んだ〈シラヒメ〉が、荷電粒子供給ファンを破壊していた。

堪らず〈デスザウラー〉は尾部から多弾頭ミサイルを発射して迎撃するが、羽根を持った〈シラヒメ〉はそれを優雅に空中で全弾回避して見せた。恐るべき運動性だ。

駄目押しをするように〈シラヒメ〉は急降下して〈デスザウラー〉の尾の付け根を踏み潰す。〈デスザウラー〉が悲鳴の様な咆哮を上げた。

（〈追跡するもの〉！）

〈防ぐもの〉を解除した〈ヤミヒメ〉の周囲に紅い形相干渉力場の光弾が無数に現れ、次々と〈デスザウラー〉に向かって撃ち出されていく。着弾と共に〈デスザウラー〉の機体が虫食いの様に削られていく。

続けて兵装選択――〈両断するもの〉を起動。巨大な剣状に形相干渉力場が形成される。

（いくぞ――〈ヤミヒメ〉！）

●
●
●

〈リントヴルム〉状態のカグヤは〈シラヒメ〉との同調接続により、意識を仮想空間上に形成している。感覚的には身ひとつで宙に浮いている様な状態だ。だが不思議と不安も恐怖も感じない。思いのままに、自分の身体の延長線上にある様に〈シラヒメ〉が動かせる。

（……もうお終い？　つまらないわね）

〈デスザウラー〉を前にして、カグヤはつぶやいた。もはや何の恐れも感じない。
すると、カグヤの前に長い白髪の男が姿を現した。先にカグヤの前に現れた時の様な、他人を見下す傲慢（ごうまん）さはそのままに、苛立（いらだ）ちの色を浮かべている。
恐らくは彼が〈デスザウラー〉の仮想人格なのだろう。もしくは、かつてヒトであった時の姿か……。
宙に浮いた様な状態でふたりが対峙する。
（君は世界を壊すのではなかったのか？）
怒りを含んだ声色で男の声がカグヤの意識に響く。
（……壊すわ。でも、少しだけ気が変わった。まだやる事が残ってる）
意識同士のやり取りでもカグヤの口調は変わらない。やはり淡々としている。
（何を今更……この世界に君の居場所など無いというのに）
（……そんなことはあたしが決める）
（愚（おろ）かな。私とひとつになれば悩む事も、苦しむ事も無い――私とひとつになれ！）
男の言葉にカグヤは底冷えのする様な冷めた口調で応えた。
（……あなたなんかと、ひとつになりたくない――）
と、明確な拒絶の意思表示をしてみせた。
（くっ）
男の姿が苦々しい表情と共に消えた。
同時に現実世界に視界が切り替わる。〈デスザウラー〉が突進してくる。二百メートルを超す巨体が迫る。
（……〈撃ち砕（ブラスター）くもの〉）
〈シラヒメ〉の前面に魔法陣の様な幾何学（きかがく）模様が浮かび、中心円から光線（ビーム）状の形相干渉（けいそうかんしょう）力場が撃ち出される。紅（あか）い閃光が〈デスザウラー〉の頭部を消し飛ばす。
同時に〈ヤミヒメ〉が起動した長大な〈両断（ザンバー）するもの〉が、〈デスザウラー〉の両脚をその名の通り両断した。
だが、まだだ。まだ終わっていない。
（――とどめを刺すぞ。カグヤ・イザヨイ）
〈ヤミヒメ〉から通信の様に声が聞こえた。不思議な感覚だと改めてカグヤは思う。
（……ええ）
カグヤは短く応えた。

六枚の羽根を持つ〈シラヒメ〉と〈ヤミヒメ〉。
〈リントヴルム〉と〈ドラグーン〉。
二体の竜の力を持つゾイドが同時に構える。
（……〈殲滅するもの〉）
（〈殲滅するもの〉！）
カグヤとアサトの声が重なる。
〈撃ち砕くもの〉を上回る高出力の二本の形相干渉力場が光線状の束になって〈デスザウラー〉のゾイドコアに突き刺さる。
形相干渉力場を浴びたゾイドコアが一瞬で消滅し、〈デスザウラー〉の巨体が次々と分解されていく。
（何故だ……何故だあああああああああああああああああああああ――――――ッ!?）
塵となって崩れていく〈デスザウラー〉を眺めていると、カグヤは長い白髪の男の断末魔の叫びを聞いた気がした。
やがて〈シラヒメ〉が荒野に降り立つ。白い羽根が塵状に分解されて消える。装甲の隙間から漏れ出ていた紅い光ももう出ていない。〈リントヴルム〉でいられる時間が終ったのだとカグヤは理解した。
「……終わったよ、フィーア」
通常のコクピットに復帰したカグヤが後方の座席に座っているであろう少女を振り返る。
早く顔が見たい。自分に向けて微笑んで欲しい。
しかし……。
「……フィーア？」
サブ・シートに紅い髪と瞳の少女の姿は無かった。

最終話

広大な荒野を舞台に二体の機獣が戦っている。
漆黒のオオカミと純白のティラノサウルス。
前者は紅(あか)いきらめきを放つツイン・レーザー・ブレードを、後者はカニバサミを思わせる一対の刃(やいば)を得物(えもの)とし、攻防を繰り返している。得物同士がぶつかり合うたびに火花が散り、金属が軋(きし)む音がする。
それ以外はただひたすら無音。
この世界に彼等だけが取り残されたかの様な静寂。
静かに、しかし激しく二体の機獣がぶつかり合う。
世界の果てで、最後の勝者を決めようとでも言う様に。

戦うその姿は儚(はかな)くも美しい。
踊る様に舞う様に。
終わらないダンスの様に。

二体の機獣が舞い踊る――

最終話　終末、もしくは世界の終わり

「『オーガノイドの限界』――ですか？」

疑問符を浮かべる研究員のひとりに、〈教授〉は「そうだ」と応えた。

ぼさぼさの白髪交じりの髪と着古した白衣姿の中年だ。その姿は拘置所であっても変わらない。

「〈オーガノイド〉と言っても万能ではない。やはり限界が存在する」

自分達と外界を隔てる格子戸を眺め、〈教授〉は続ける。

「ゾイドとの感応はただでさえ〈オーガノイド〉に負担を強いる。〈ヤミヒメ〉と言ったか、あれに入っている純粋な〈オーガノイド〉でさえ、最後には『融合』という形でしか自己を保つ事が出来なかった」

「それじゃあ、今頃フィーアは……」

別の女性の研究員の尻切れになった言葉に〈教授〉が頷く。

「とっくに限界を迎えているはずだ。〈リントヴルム〉の力を使ったのであれば、おそらくはもう〈シラヒメ〉との融合を果たしているはずだ」

「そんな……カグヤはその事を知っているんですか？」

「知らせていない。フィーアに口止めされていたから――いや、違うな。私は怖かったんだ。カグヤ自身は気づいていないだろうが、ようやく大切なものを得られた彼女に、絶望を突きつけるのが怖かった」

「〈教授〉……」

そう言って目を伏せる〈教授〉の姿は懺悔をする罪人の様で痛々しかった。

●　●　●

〈シラヒメ〉と距離を取り、試作型ツイン・レーザー・ブレード〈クロヤシャ〉を〈ヤミヒメ〉に構えさせる。

「〈クロヤシャ〉――フルドライブッ！」

『了解。〈クロヤシャ〉――ドライブ・イグニッション』

アサト・タチバナの音声入力に応じ、サポート・ユニットであるクノキが承認の声

を告げる。

ナギナタ状だった〈クロヤシャ〉の刃(やいば)が折りたたまれ、二等辺三角形を形成する。巨大なレーザー発振器となったそれから、長大な紅(あか)いレーザーの刃が発振される。それは巨大な剣(バスター・ソード)を彷彿(ほうふつ)とさせる。

「バスター・スラッシュ！」

〈ヤミヒメ〉が駆ける。

口にくわえた最大出力の〈クロヤシャ〉を突きつける様に突進する。

これに〈シラヒメ〉はエクス・ブレイカーで応じる。

互いの得物(えもの)が激しく衝突し、スパークが発生、続くタイミングで爆発が起きた。限界を迎えた〈クロヤシャ〉のレーザー発振器が爆発し、その勢いで〈シラヒメ〉のエクス・ブレイカーも、フリー・ラウンド・シールドごと吹き飛ばされた。

「すまん――〈クロヤシャ〉」

アサトは爆発で無残に破壊された〈クロヤシャ〉を偲(しの)び、しかし一瞬で意識を切り替える。

「〈カグヅチ〉――抜刀モード！」

『了解。〈カグヅチ〉――起動(イニシャライズ)』

〈ヤミヒメ〉の背部に格納されていた長大な白刃の剣が展開される。それが支持腕(アーム)によって〈ヤミヒメ〉の口元まで移動する。〈ヤミヒメ〉が剣の柄(つか)をくわえ、抜刀する。

「〈業火炎上〉――」

激発音声(トリガー・ヴォイス)。

そして――

「吠(ほ)えろ――〈カグヅチ〉！」

白刃の刃に高熱が宿る。触れるものすべてを溶断する灼熱の剣。

〈ヤミヒメ〉がまたも駆ける。明らかに機体のサイズにあっていない長大な剣をくわえて。

一気に間合いに飛込み、〈カグヅチ〉を振るう。

これに〈シラヒメ〉はバスター・クローで応じた。高速回転する三枚の刃によるドリルだ。

またも互いの得物がぶつかり合い、激しく火花が散る。

〈ヤミヒメ〉も〈シラヒメ〉も一歩も退(ひ)かない。

やがて得物がはじき合い、強制的に両者の距離が開く。

睨(にら)み合う二体の機獣。

漆黒をまといし闇色の姫と無垢なる純白の姫。

何の因果か、共に『姫』の名を持つゾイドの視線が交差する。
束の間の静寂――しかし、それもすぐに破られる。
どちらからともなく幾度も戦端を開く。
「……」
もはや言葉は無い――語るべき言葉をアサトは持っていない。
だから――

●
●
●

〈ヤミヒメ〉の長大な炎熱刀をバスター・クロー――〈ワールド・エンド〉で迎え撃つ。
はじき、はじかれ、幾度と無く攻防が入れ替わる。
無意識に〈シラヒメ〉を操りつつも、カグヤ・イザヨイの目は敵機を見ていなかった。
「……フィーア」
消えてしまった少女――自分をパートナーと呼んでくれた少女の名をつぶやく。
「……フィーア……フィーア……フィーア……」
何度も何度も、譫言の様に。
「……フィーア……フィーア……フィーア――」
いつも一緒に居てくれた。
いつも呼べば応えてくれた。
いつもとなりで微笑んでくれた。
いつも、いつも……。
なのに――
「……ねえ、フィーア――月が紅いよ」
何も映していない虚ろな瞳でコクピットから見上げた夜空には、丸い月が紅く輝いていた。

●
●
●

〈ヤミヒメ〉と〈シラヒメ〉――二体の機獣の戦いを見守る者達が居た。
歩くのがやっとと言った状態のゴドス・タイプ――〈ビアトリス〉のコクピットに居るマヘリア・メリルとミゼット・レミントンだ。
二体の戦闘は激しく、近寄れない。

互いの武器を壊し合い、更に展開した武装もいつ壊れてもおかしくない。
現に、ぶつかり合う武装は火花を散らし、悲鳴を上げた様な音を響かせている。
そして、その時が来た。
最大稼働状態(フルドライブ)に入った〈ヤミヒメ〉の炎熱刀――〈カグヅチ〉と、〈シラヒメ〉のバスター・クローがぶつかりあい、壊し合った。
そのタイミングを見計らっていた様にマヘリアが両機に通信を繋ぐ。
「カグヤさん、勝負は付きましたわ！　もう投降してください！」
カグヤの目的は最大出力のバスター・クローを使い、〈バースト・ポイント〉に衝撃(インパクト)を与え、惑星破壊を引き起こす事のはずだ。そのための武器を失った今、これ以上戦闘を続ける意味は無い。
しかし――
『……』
通信機からは無言。
〈シラヒメ〉は停止する気配を見せない。
「アサトさん、聞こえてますわね。もう終わったんです。戦闘を中止してください！」
『馬鹿言(い)うな。こいつはまだやる気だ』
対する〈ヤミヒメ〉のアサトからはそんな言葉が返ってきた。
「どうしてですか？　こんな戦いに何の意味があると言うんです!?」
『こいつの気が済む』
「な――」
マヘリアは言葉を失った。
そんな事のために？
「カグヤさん、聞いてください。そんなことのために、これ以上傷つけ合う必要は無いんです！」
『……『そんな事』？』
〈シラヒメ〉からの応答があった。底冷えのする様な冷たい声でカグヤは言う。
『……あたしにはもう何も無い。フィーアが消えてしまって、もう本当に何も無くなってしまった』
「……カグヤさん」
『……もうどうすればいいか判らない……判らないの』
〈シラヒメ〉が頭部のチャージング・ブレードを振り下ろす。〈ヤミヒメ〉はそれをバックステップでかわし、肩から体当たりをして〈シラヒメ〉の体勢を崩す。

それでも〈シラヒメ〉は倒れない。尾を地面に叩きつける反動で、無理矢理体勢を維持し、

『……〈ヴァリアブル・スライサー〉――』

カグヤの撃発音声。

『――〈エネルギー・ブラスト〉ッ！』

アサトも応じる様に撃発音声を叫ぶ。

ほぼ同時に〈シラヒメ〉と〈ヤミヒメ〉の中間に青白い閃光が生まれ、轟音と共に衝撃波が発生した。どちらもEシールドの応用技だ。それが激突し、すさまじいエネルギーが光と音に変換されたのだ。

〈ビアトリス〉のコクピットにも衝撃が伝わる。

それでもマヘリアは二体の機獣から目を離さない。どちらももう限界のはずだ。〈竜の力〉を行使し、武装を破損させ、消耗しているのは明らかだった。

少なくとも〈ヤミヒメ〉には〈シラヒメ〉に対抗出来る装備はもう無いはずだ。故に。

「アサトさん、目標は達しました。ここは退きましょう」

『冗談じゃない。今いいところなんだよ』

アサトの声は弾んでいて、どこか楽しそうな響きすら感じる。

実際、〈ヤミヒメ〉は〈シラヒメ〉に押されていない。

「何言ってるのよ、このボンクラ！　もう装備は無いんでしょ!?」

「まだツメもキバもある。とっておきもな」

口を挟んできたミゼットの言葉もどこ吹く風だ。

「……何か手があるんですのね？」

「そういうことだ」

通信機の向こう側で、何でも屋を自称するゾイド乗りが、不適に笑った気がした。

●　●　●

「〈Gクッラシャー〉――射出準備！」

『了解。〈Gクラッシャー〉――射出準備完了』

〈ヤミヒメ〉のコクピットでアサトとクノキが言葉を交わす。

〈ヤミヒメ〉の両前脚肩部の装甲板が開き、一対の銛の様な刃先が姿を見せた。

「接近する。確実に当てろよ」

『了解しました』

言うなり〈ヤミヒメ〉が駆け出す。牽制（けんせい）に使える武器は無い。二五〇ミリ・ライフルは切り離し済み、近接戦闘用の〈クロヤシャ〉と〈カグヅチ〉もすでに無い。残ったのは低出力のホーミング・レーザーと、対〈シラヒメ〉用に準備した〈Gクラッシャー〉だけだ。

〈ヤミヒメ〉が〈シラヒメ〉の間合いに入る。チャージング・ブレードと、アンカー・クローをかわし、背後を取った。

「やれ！」

『了解』

アサトの号令とともに〈Gクラッシャー〉の先端が打ち出され、〈シラヒメ〉の背部に二つの銛（もり）が突き刺さった。銛はワイヤーで〈ヤミヒメ〉の肩と繋がっている。

「放電開始（ディスチャージ）！」

アサトの号令のもと、ワイヤーを介して〈シラヒメ〉に高圧電流が散発的に流されていく。

――グゥオオオッ⁉

たまらず〈シラヒメ〉が悲鳴の様な咆哮を挙げた。

そして、背部に突き刺さった銛を引き抜こうと暴れだした。

〈Gクラッシャー〉。

その名の通りジェノザウラー（G）・クラスのゾイドを打倒すべく開発された武装だ。

ワイヤーの先端の銛を打ち込み、高圧電流を流し込む事で相手を無力化する。対〈シラヒメ〉用の切り札。

もがく〈シラヒメ〉の背後を常に取り、ワイヤーを抜かせないように距離を維持する。

あと数秒も電流を流し続ければアサトの勝ちだ。

だが、〈シラヒメ〉が動きを見せた。

脚部のアンカーを降ろし、尾の冷却システムも展開する。まるで荷電粒子砲を撃とうとする様に。

（何をするつもりだ？）

怪訝（けげん）に思うアサト。

そこへ――

「――な⁉」

〈ヤミヒメ〉のコクピットに電流が逆流してきた。〈シラヒメ〉が荷電粒子砲のエネルギーを利用し、〈Gクラッシャー〉に負荷をかけてきてきたのだとアサトは判断した。

「〈Gクラッシャー〉を切り離せ！」

高圧電流によるショックで意識を失いそうになりながら、なんとか言葉にする。

『命令を受け付けません。切り離し（パージ）不可能です』

「くっ……――」

高圧電流にさらされ、アサトの意識は飛んだ。

●●●

「……」

意識が覚醒すると、カグヤは周囲の状況を確認した。

ただ、ひたすらに真っ黒い空間。暗いのではなく黒い。光源でもあるのか、自分の姿ははっきりと見る事が出来る。

この感覚をカグヤは知っている。

「……仮想空間？」

「そうだよ、カグヤ――愛しの我が主（マイ・ロード）よ」

声がした方に振り返れば、白髪橙瞳の人物が居た。

「……シラヒメ」

一見すると女性の様な美しい容姿だが、彼は男性――正確に言えば男性格である。カグヤの愛機〈シラヒメ〉がヒトの姿を持ったもの。

仮想空間における対人インターフェイスである。

「……あたしはどうなったの？」

「〈ヤミヒメ〉の新兵器――あれにやられた。とっさに機転を利かせた君のおかげで、なんとか巻き添えに出来たんだけど。その影響だろうね。今の僕は〈ヤミヒメ〉と繋がった（オンライン）状態にある」

シラヒメが視線を向けた先には、二人の人物が居た。男と女だ。

男の方はすぐに判った。

アサト・タチバナ。

ならば隣に居るのは〈ヤミヒメ〉の対人インターフェイスだろう。

「……よう。また会ったな」

口火を切ったのはアサトだった。

「フィーアは……本当に消えたんだな」
こちらに向けてくる顔は無表情で、カグヤを哀(あわ)れんでいる様には見えない。
「……ええ。あなたの〈オーガノイド〉も同じ様に消えたの？」
「ああ。もう三年になる」
「……そう。あなたは平気だったの？　パートナーだったんでしょう？」
「平気な訳がない。気が狂いそうだった……呪ったよ、あいつを生かしてくれないこの世界の全てを」
そこで初めてアサトの表情が歪(ゆが)んだ。
「だがそれでも俺は絶望しきれなかった。消える前にあいつは俺に言ったよ、『ずっと貴方(あなた)の側(そば)にいる』――その言葉のおかげで今日まで生きてこれた」
「……」
「思えばこいつにもずいぶん助けられた」
そう言ってアサトは傍(かたわ)らにいる〈ヤミヒメ〉の化身の娘を抱き寄せた。
「な⁉　馬鹿者、こんな所で……！」
慌てふためくヤミヒメを余所(よそ)にアサトは続ける。
「こいつだけじゃない。気付けば大事なものが増えてて驚いた」
「……だから、何だって言うの？」
カグヤは苛立(いらだ)った。この男は自分に無いものを持っている。それが腹立たしかった。
「……あたしはあなたがうらやましい。あたしにはフィーアしか居ないのに。フィーアだけだったのに」
「それはあんたの世界が閉じていたからだ。何も見ないで、聞かず、閉じこもっていたからだ。そこから出て、これからいくらでも増やしていけばいい」
「……簡単に言わないで」
「簡単な事なんだよ。気付いてないだけだ」
「……」
「俺と一緒に来るか？　フィーアを元に戻す方法だってあるはずだ」
アサトがこちらに向けて手を差し出してくる。
シラヒメはにこにこと事態を見守っている。
ヤミヒメはつまらなさそうにそっぽを向いている。
（この手をつかめば……）
それは救済であるかの様にカグヤは感じた。
思わず手を差し出す。

二人の手が一瞬重なる。
だが――

『――本当にそれでいいの？』

カグヤの脳裏に声が聞こえた。

『――許されると思っているの？』

それは幼い少女のものだ。

『――あなたが普通に生きていけるわけないじゃない』

それは昔の自分だ。

『――あなたは破壊者なんだから』

フィーアと出逢（であ）う前の自分が問いかけてくる。

『――壊しましょう？　すべてを』

「……あ……いやぁ……ああ……ああああああああああああああああああ――――ッ!?」

ブレーカーが落ちる様に、カグヤの意識はぶつんと途切れた。

●
●
●

「〈Gクラッシャー〉、強制排除（パージ）！」
『了解。〈Gクラッシャー〉、強制排除（パージ）。続けてホーミング・レーザーを拡散放射』
通常空間に復帰したアサトが瞬時に指示を出す。〈シラヒメ〉と繋がっていたワイヤーが切り離され、続いて紅（あか）い弾幕が視界を奪った。
ホーミング・レーザーの応用による目くらましだ。

危険を感じたアサトが〈ヤミヒメ〉をその場から離脱させる。
その場を青白い閃光が奔ったのは次の瞬間だった。
「苛電粒子砲!?」
『危険な状況です。〈シラヒメ〉に荷電粒子砲を撃つ余力は無いはずです』
「暴走してるのか……だが、どうして」
仮想空間に居た事は覚えている。あとほんの少しでカグヤを助けられたはずなのに。
「……」
一瞬、触れ合った手の感触を覚えている。彼女に何があった？
やがて目くらましの光が消え、〈シラヒメ〉が姿を現す。オレンジ色のカメラ・アイをぎらつかせ、こちらを見ている。

『――殺して』

「!?」
声が聞こえた。
「カグヤ・イザヨイ！　あんたなのか!?」
〈シラヒメ〉に向かって通信を開く。だが、応答は無い。

『――お願い……あたしを殺して』

また聞こえた。これはカグヤの心の声だ。
「……ふざけるなよ――」
アサトは搾り出すようにつぶやいた。
〈シラヒメ〉がチャージング・ブレードを構えて突進してくるのをかわしながら、言う。
「――ふざけるな！」
再度、突進してきた〈シラヒメ〉の攻撃をかわし、カウンターの要領でストライク・クローを〈シラヒメ〉の顔面に打ち付けた。
〈シラヒメ〉がよろりと姿勢を崩す。
「死にたい奴は勝手に死ねばいい！　生きてりゃいい事があるなんて言うつもりも無い！けど、あんたはまだ生きてるんだろう!?」
畳み掛けるように〈ヤミヒメ〉が仕掛ける。右、左と、交互にストライク・クローを繰り出す。

「あきらめるな！　勝手に見限るな！　この世界はあんたを否定なんかしちゃいない――ッ!!」

『――――!?』

最後の一撃を放ち、〈ヤミヒメ〉はバックステップを踏んで〈シラヒメ〉と距離を取った。

●　●　●

誰かの泣き声でカグヤは意識を取り戻した。

暗い所で女の子が泣いている。こちらに背を向けて、膝を抱えて泣いている

「……どうして泣いてるの？」

カグヤは少女の事を知っている。だから声を掛けた。

「……そう。お母さんも、お父さんも死んでしまったのね」

少女は何も言わない。ただ泣き続けるだけだ。

それでも、カグヤは少女の心が見えた。彼女に伝えたい事があった。

「……あのね、今は辛い事ばかりかもしれない。けど、ずっとそうじゃないんだよ」

少女が顔を上げる。

「……もう大丈夫だから。あなたのことが大好きだから。もう泣かないで」

「……もういいの？」

初めて少女が言葉を口にした。

「……ええ。もう大丈夫。きっと生きていけるから」

慈しむ様に、自分に言い聞かせるようにして、カグヤは少女を抱きしめた。

「……ごめんね、あたし――」

少女の姿が光になって消えていく。

「……ありがとう」

●　●　●

一時停止していた〈シラヒメ〉が再び動き出した。

よろよろと不安定な動きで、なんとか立っている――そんな様子だ。

「……」

アサトは油断なくその姿を見据(みす)える。

『……アサト・タチバナ、あたしはあなたとは行けない』

〈シラヒメ〉から通信が入る。カグヤからだ。

『……あなたとの決着を付けないと、あたしは前に進めない――だから』

〈シラヒメ〉がチャージング・ブレードを構える。

『……戦って。確かめさせて。あたしが本当に生きているのかどうか』

アサトは無言で愛機を構えさせる。これが答えだと言う様に。

『……』

カグヤも無言で応える。

もう言葉は必要ない。

先に仕掛けたのは〈ヤミヒメ〉だった。飛びかかる勢いでストライク・クローを繰(く)り出す。

〈シラヒメ〉の右腕が吹き飛ぶ。

対する〈シラヒメ〉は失った右腕に拘泥(こうでい)せず、チャージング・ブレードを振り下ろす。

〈ヤミヒメ〉はこれを白刃(しらは)取りの要領でキバで受け止める。そのままエレクトロン・バイト・ファングがチャージング・ブレードをへし折った。

〈シラヒメ〉が悲鳴を上げながら、蹴りを放つ。

〈ヤミヒメ〉は受け身を取りながら、蹴り飛ばされた勢いを殺しつつ後方に着地。また駆け出す。

〈シラヒメ〉が残った左腕のアンカー・クローを撃ち出す。

紙一重でかわしたつもりだったが、〈ヤミヒメ〉の右肩の装甲がはじき飛ばされた。

だが、そんな事はおかまいなしに〈ヤミヒメ〉は突進。〈シラヒメ〉の腹部に体当たりをかける。

〈シラヒメ〉は地面を削りながら十数メートルも飛ばされると、両脚を踏ん張り体勢を立て直す。

そして脚部のアンカーをおろし、尾部の冷却システムを展開して行く。

荷電粒子砲だ。

しかし〈ヤミヒメ〉は回避行動に移らない。真正面から〈シラヒメ〉に向かって駆け出して行く。

「Eシールドを対荷電粒子モードに。続けて〈ラグナレク・ファング〉起動！」

『しかし……』

アサトの命令にクノキが難色を示す。無機質なはずの機械音声（マシン・ヴォイス）が逡巡（しゅんじゅん）する。
「限界なのは判ってる。それでもだ――いいな、〈ヤミヒメ〉？」
アサトの問いに、肯定（こうてい）する様に愛機が吠（ほ）える。
「だそうだ」
『了解。Eシールドを対荷電粒子モードで展開。〈ラグナレク・ファング〉――起動（イニシャライズ）。ただし、使用限界時間は五秒間とします』
〈ラグナレク・ファング〉。
それは一部の〈コマンドウルフ〉にのみ発現する特殊能力である。ゾイドコアが瞬間的に活性化し、運動性と反応速度を極限まで高める事が出来る。反面、その代償としてゾイドコアに多大な負担がかかるため、最後の手段とされている。
〈シラヒメ〉が荷電粒子砲を発射する。青白い光の奔流（ほんりゅう）が〈ヤミヒメ〉に迫る。
〈ヤミヒメ〉は怯（ひる）まない。Eシールドに守られながら、荷電粒子の流れに逆らって駆ける。
「もう少し……」
〈ヤミヒメ〉ももう限界が近い。コクピットはけたたましい警報と赤い警告灯でいっぱいだ。
「あと少しなんだ……」
〈ヤミヒメ〉の速度が落ちる。やがてその姿が荷電粒子の波に飲み込まれて見えなくなる。
だが、それでも――
「行けぇぇぇッ――〈ヤミヒメ〉！」

――ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！

〈ヤミヒメ〉の咆哮と共にEシールドが刃の様に荷電粒子を切り裂いた。
青白い閃光の中から〈ヤミヒメ〉の黒い機体が跳（と）び上がる。
「〈ラグナレク・ファング〉――ッ！」
機体の駆動系に回りきれなかった余剰エネルギーが、エレクトン・バイト・ファングに流れ込む。通常の三倍にも及ぶ高出力の〈ヤミヒメ〉のキバが〈シラヒメ〉の喉元（のどもと）に食い込む。
喉元からバチバチと火花を散らしながら、〈シラヒメ〉が激しくのたうつ。
やがてまばゆい閃光が二体の機獣を包み込み――爆音がすべての音を消し去った。

そして、閃光の中心に向かい光の柱が降りた。

それは空からの使者が地上に舞い降りた様でもあり、死者を天に導く道標（みちしるべ）の様でもあった。

その一条の光は世界中で観測された。

ある者はただ呆然（ぼうぜん）と、ある者は奇跡を見る様に、ある者は凶兆（きょうちょう）の前触れの様に光の柱を見つめていた。

時間にしてわずか数秒。

その一瞬にも近い間だけ、世界中の争いが止まったという。

エピローグ

すべてが夢だった気がする。
楽しい事だけではなかった。むしろ辛(つら)い事の方が多かった。
だが、目覚めてしまうのが少しもったいない気もする。
もう少しだけまどろんでいたかった。
もう少しだけ夢の中に居させて欲しかった。
だけど――
「――カグヤ。カグヤってば、起きて！」
自分を呼ぶ声が心地良い。
もうずいぶんと長く聞いていなかった様に思う。
「やっと起きた……今日は休みだから買い物に行くんでしょ？　せっかく〈教授〉が車を出してくれるって言ってくれたのに、もう三十分も待たせてるよ？」
紅(あか)い髪と瞳の少女が、可愛らしく頬(ほお)を膨らませる。
「……フィーア？」
「どうしたの、カグヤ？　寝ぼけてる？」
「……なにかね、夢を見ていた気がするの」
「夢？」
紅い髪と瞳の少女が疑問符を浮かべる。
「……フィーアがね、あたしの前から居なくなるの」
「……」
「……そんなはずないのにね」
わずかな静寂が場に降りる。
「……フィーア？」
少女は無言。
「……どうして泣いてるの？」
「泣いてないよ」
「……でも」
俯(うつむ)く少女の姿は、震えているのを必死に堪(こら)えている様に見える。

「私がカグヤの前から居なくなる訳ないじゃない」
そう言って笑みを浮かべる少女の瞳は、やはり涙で濡(ぬ)れている。
「夢でもいいよ。カグヤと一緒に居られるなら」
「……？」
少女に抱きしめられる。
懐かしい匂(にお)い。
懐かしい感触。
懐かしい体温。
何もかもがどうでも良くなってくる。
「ずっと一緒だから……大好きだから」
官能的なささやきに、再び意識が沈んでいきそうになる。
「……ねえ、フィーア――」
「なに？」

「……あたしもね――大好きだよ」

●
●
●

紅(あか)い世界。
見渡す限り真紅に染まった、どこまでも紅く、紅い世界。
「――マスター。起きてください、マスター」
聞き慣れた声。
だが今日はどこか違っている気がする。
「クノキ？」
目を開くと紅い髪と瞳の娘が居た。
「なんか、久しぶりだな」
「そうですね。こうして逢(あ)うのは約三年ぶりです。私にはあまり実感がありませんが」
「少し変わったか？」
「はい。貴方(あなた)に合わせて『成長させて』みました。いかがでしょう？」
そう言って娘は、くるっとその場で回って見せた。
「それとも少女の姿の方が良かったでしょうか？　御希望であれば以前の姿にも設定出来(でき)ますが」

「せっかくだからその姿で居ろ。俺にも世間体があるしな」
「了解しました」
わずかな沈黙。
「クノキ、あれからどうなったんだ？　死んじゃいない様だが」
「……」
「ま、どうでもいいか。お前とこうして居るのも悪くない」
「相変わらずのダメ人間ぶりですね」
「そうか？」
「はい」
「そうかもな」
「……はい」
再び沈黙。
だがそれもまたすぐに破られる。
「マスター。貴方は選択しなければなりません」
「ん？」
「この場所は現実世界と仮想空間の狭間にあります。貴方が望めばすぐにでも通常空間に復帰出来ます。そして、それを拒む事も可能です」
「……」
「選択してください、マスター。貴方の望む世界を」
「……現実なんて嫌になる事ばかりだよ。生きてても、どうせ変わらない事の繰り返しだ」
娘は無言。
「けど、生きてて良かったと思える事もたまにある。だから絶望しきれない」
だから――
「生きていられるうちは、生きなきゃいけないんだろうな――本当に面倒くさいと思うよ。まるで呪いだ」
「そうですね。そうなのかもしれません」
生きる事は生命体の義務だという。ならばそれは呪いと同じだ。
だがそれでも生物は生きていく。
現実を受け入れながら、時に抗いながら、『それでも』と前へ進んでいく。
「俺は生きるよ。どうしようもない世界だが、それでも……」
変えていける。変わっていけると思いたいから。
「ただし、今度はお前も一緒だ」

差し出した手を娘はぎゅっと握り返す。

「おかえり――クノキ」

「ただいま――マスター」

漆黒の狂襲姫〈完〉

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『漆黒の狂襲姫』をお届け致しました。

処女作です。二〇〇七年から二〇一〇年にかけて執筆し、翌年に加筆修正＋新作エピソードによる『真説・漆黒の狂襲姫』として旧サイトに掲載していました。アサトの年齢が二十三歳なのは、書き始めた当時の僕がその年齢だったからです。

再掲載するに当たって読み返したのですが、これが――つらい。

さすがに気になる部分は手を加えようと思ったのですが、第一話だけで相当な時間がかかってしまい、このペースだと時間がかかりすぎると判断し、恥を忍んでほぼ原文のまま掲載する事にしました（第一話も原文に戻した）。約八年前に加筆修正しているとはいえ、処女作という事でご容赦ください。

本来であれば、こんなものをわざわざ再掲載すべきではないのですが、連載中の『ゾイやみ』にカグヤまで出してしまったので、その出典元も読めるようにしました。これが元ネタです。

回収してない伏線も多々あるのですが、過去編である『宵闇の凶終姫』が未完のまま旧サイト閉鎖となったため、判らないままの事件や単語が多くてすみません。

最後に――過去の自分の拙い文章にお付き合いくださり、ありがとうございました。本文未読でイントロダクションと此処だけ読んでいる方は、気が向いたら読んでやってください。読まなくても『ゾイやみ』には差し支えません。あくまで、カグヤの事や、元ネタに興味がある方に向けたものなので。

今じゃ、もうこんなの書けない……。

２０１９／１／23　流遠亜沙

※スペシャルサンクス（五十音順／劇中に登場するキャラや装備でお世話になりました）

紙白さん（ホビコム）

サーデェンスさん（個人サイト『ゾイド&装甲至上者』）

滝上さん（ブログ『短三和音な日々』）

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX　第2部』小説ページに戻る